

羽場丸山地区土地区画整理事業第1工区羽場一大瀬木線
建設に伴う 埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸 山 遺 跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯田市教育委員会

羽場丸山地区土地区画整理事業第1工区羽場一大瀬木線
建設に伴う 埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸 山 遺 跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯 田 市 教 育 委 員 会

序

近年、飯田市の中心街地では宅地需要が飽和状態に達しており、宅地の周辺地区への拡散化が進行しつつあります。中心市街地に隣接する羽場・丸山地区においても、今後一層市街地化が進むものと思われます。しかし両地区の公共施設等の設備は十分でなく良好な居住環境を実現するために道路・公園などの整備改善が求められ、両地区的土地区画整理が実施されることになりました。

一方その両地区には私達の先人が残した足跡、埋蔵文化財包蔵地があり、こうした価値ある文化財はできるかぎり現在の姿のまま後世に残していくことが大切です。しかし本事業のもつ高い公共性を考慮する時、次善の策ではありますが、発掘調査による記録保存をはかることは止むを得ないことと言えましょう。

発掘調査によって弥生時代から古墳時代にかけての集落跡がたくさんの遺物とともに発見され、この時期の集落を研究する上で貴重な知見が得られました。今後本発掘調査の成果が広く市民の皆さんや研究者の方々に活用されてこそ今次の調査が有意なものになるといえます。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査・整理作業に深く理解と協力をいただいた飯田市建設部都市計画課、様々な気象条件の下で発掘調査に従事いただいた作業員の方々、並びに関係各位に心から感謝申し述べ、刊行の辞といたします。

昭和63年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

1. 本書は、羽場丸山地区土地区画整理事業第1工区羽場一大瀬木線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市教育委員会が飯田市建設部都市計画課より委託を受け実施した。
3. 発掘調査は、昭和62年5月から12月にかけて断続的に実施し、昭和62年度中に整理作業及び報告書の作成を行なった。
4. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡名に略号M R Yを用いた。
5. 本書の記載は、調査区B～E区の順に行なった。遺構図は本文と合わせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は、小林正春・佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・馬場保之が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお本文の一部について小林が加筆・訂正を行なった。
7. 本書に掲載した図面類の整理は佐合・馬場が、遺物実測は佐合があたった。なお整理作業実施にあたり佐々木・吉川が補佐した。
8. 本書の編集は、調査員全体で協議の上、佐々木・佐合・馬場が行ない、小林が総括した。
9. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている。
10. 本書に関連した遺物及び図面類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序	
例 言	
目 次	
I 経 過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史環境	3
III 調査の結果	9
1. B区	9
(1) 柱 穴	9
(2) その他	10
2. C区	10
(1) 壊穴住居址	10
① 1号住居址 ② 2号住居址 ③ 3号住居址 ④ 4号住居址	
⑤ 5号住居址 ⑥ 6号住居址 ⑦ 7号住居址 ⑧ 8号住居址	
(2) 土 坑	21
① 土坑59 ② 土坑60 ③ 土坑61 ④ 土坑62 ⑤ 土坑63	
③ 柱 穴	21
④ 暗渠排水	23
⑤ その他	23
① 焼土散布地 ② たたき状生活面	
3. D区	24
(1) その他	24
4. E区	25
(1) 土 坑	25
① 土坑1 ② 土坑2 ③ 土坑3 ④ 土坑4 ⑤ 土坑5	
⑥ 土坑6 ⑦ 土坑7 ⑧ 土坑8 ⑨ 土坑9 ⑩ 土坑10	
⑪ 土坑11 ⑫ 土坑12 ⑬ 土坑13 ⑭ 土坑14 ⑮ 土坑15	

⑯ 土坑16	⑰ 土坑17	⑯ 土坑18	⑯ 土坑19	⑯ 土坑20
㉑ 土坑21	㉒ 土坑22	㉑ 土坑23	㉑ 土坑24	㉑ 土坑25
㉓ 土坑26	㉔ 土坑27	㉓ 土坑28	㉓ 土坑29	㉓ 土坑30
㉕ 土坑31	㉖ 土坑32	㉕ 土坑33	㉕ 土坑34	㉕ 土坑35
㉗ 土坑36	㉘ 土坑37	㉗ 土坑38	㉗ 土坑39	㉗ 土坑40
㉙ 土坑41	㉚ 土坑42	㉙ 土坑43	㉙ 土坑44	㉙ 土坑45
㉛ 土坑46	㉜ 土坑47	㉛ 土坑48	㉛ 土坑49	㉛ 土坑50
㉝ 土坑51	㉞ 土坑52	㉝ 土坑53	㉝ 土坑54	㉝ 土坑55
㉞ 土坑56	㉟ 土坑57	㉞ 土坑58		

(2) 溝 址	35
① 溝址 1	
(3) 柱 穴	37
(4) 暗渠排水	37
(5) その他	37
① 遺構外出土遺物	
② その他	
M まとめ	39

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査位置及び周辺地図	7
挿図 3 丸山遺跡遺構全体図	8
挿図 4 M R Y B区柱穴平面図	9
挿図 5 M R Y 1号住居址	11
挿図 6 M R Y 2号住居址	12
挿図 7 M R Y 3号住居址	13
挿図 8 M R Y 4号住居址	14
挿図 9 M R Y 5号住居址	16
挿図10 M R Y 6号住居址	17
挿図11 M R Y 7号住居址	18
挿図12 M R Y 8号住居址	20
挿図13 M R Y C区土坑59・61・62・63、柱穴平面図	22
挿図14 M R Y C区土坑60	23

挿図15 M R Y E区土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・17・ 18・40・46・52・53・54・55・56・57・58、柱穴平面図	26
挿図16 M R Y E区土坑13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・25・26・27・ 28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・41・ 42・43・44・45・47・48・49・50・51、柱穴平面図	28
挿図17 M R Y 溝址1	36

図 版 目 次

第1図 M R Y 1号住居址出土遺物	42
第2図 M R Y 1・2号住居址出土遺物	43
第3図 M R Y 2号住居址出土遺物	44
第4図 M R Y 4・6号住居址出土遺物	45
第5図 M R Y 6・7号住居址出土遺物	46
第6図 M R Y 出土鉄製品、石製品、石器	47
第7図 M R Y 土坑1・2・3・11・12・15・29・32・33・35・36・41・45・46・ 52出土遺物	48
第8図 M R Y 土坑53・56、溝址1、B・C区遺構外出土遺物	49
第9図 M R Y E区遺構外出土遺物	50
第10図 M R Y "	51
第11図 M R Y 4号住居址、E区遺構外出土遺物	52

写 真 図 版 目 次

図版 1 丸山遺跡全景
図版 2 B区全景、C区全景
図版 3 1号住居址・遺物出土状況
図版 4 2号住居址・遺物出土状況
図版 5 2号住居址遺物出土状況、3号住居址
図版 6 4号住居址、同炉址・断面
図版 7 5号住居址
図版 8 6号住居址・入口施設
図版 9 6号住居址カマド・断面
図版10 7号住居址

- 図版11 8号住居址、土坑59
- 図版12 土坑60・61
- 図版13 C区暗渠排水
- 図版14 D区全景、D K99暗渠排水
- 図版15 E区全景、E区土層堆積状況
- 図版16 土坑1・2・52～56
- 図版17 溝址1・断面
- 図版18 E A95暗渠排水、E区遺構外出土遺物
- 図版19 E区遺構外出土遺物
- 図版20 1号住居址出土遺物
- 図版21 1号住居址出土遺物、2号住居址出土遺物
- 図版22 2号住居址出土遺物
- 図版23 2号住居址出土遺物、4号住居址出土遺物
- 図版24 6号住居址出土遺物、7号住居址出土遺物
- 図版25 土坑出土遺物
- 図版26 溝址1出土遺物、B・C区遺構外出土遺物
- 図版27 E区遺構外出土遺物
- 図版28 E区遺構外出土遺物
- 図版29 E区遺構外出土遺物、丸山遺跡出土鐵製品・石器
- 図版30 調査風景
- 図版31 調査風景、見学風景

I 経 過

1. 調査に至るまでの経過

飯田市における市街地の形成は、天竜川を望む段丘突端部に構築された飯田城によるものである。段丘上における飯田城の位置は段丘最先端にあるため、近世における城下町の形成は同一段丘面上の西方一帯に展開され、標高的には城より高位に立地している。現在、市街地化している範囲は、近世の城下に加え、近代の鉄道敷設によって区切られた現在のJR飯田線以東が主体となっている。

しかし、近年飯田市においても小規模ながら都市形態の変化が現われつつあり、特に住居地域の市街地からの拡散——ドーナツ化現象が顕著になりつつある。そうした中で、市街地と同一段丘面上にあり、市街地西方に広がる風越山麓に至る東野・丸山・羽場地区の宅地化は加速度的に進行しつつある。また、急速に展開する宅地化現象は、無秩序な開発に至る危険性を含んでおり、行政の対応による計画的であり有効な土地利用の姿が求められるに至った。そこで、昭和40年代の後半から飯田市による都市計画事業が推進され、まず東野地区の土地区画整理が実施され、現在の整備された土地景観がある。引き続いて、丸山地区・羽場地区における土地区画整理事業が計画され、当面丸山地区の事業実施がなされることとなった。

事業実施計画が具体的に進行する中で、事業実施範囲内に埋蔵文化財の包蔵地が所在するため事業実施者である飯田市建設部都市計画課と、文化財保護者である飯田市教育委員会とで再三にわたる協議を経て、現地での試掘調査を実施し、その結果により本格的な発掘調査実施の要否を決することとなった。

一方、事業実施にあたっては、都市計画課による地元への説明等の経過を経て昭和62年度に具体的に現地での作業着手となり、それに先立って本書に関する試掘調査・発掘調査実施となった。

なお、その間、飯田市教育委員会は文化財保護のため、長野県教育委員会からの指導・助言を得ながら具体的な方向付けを行なった。
(小林正春)

2. 調査の経過

関係者の諸協議に基づき、昭和62年5月6日、試掘調査に着手した。

まず羽場大瀬木線の路線基準杭を基準に調査区を設定した。No.4杭をA・B区の、No.9杭をC区の、No.14杭をE・F区の境界とし、各区を南側からアルファベット順に2m間隔に区切った。東西方向は西から2m毎に94~105列とし、路線センターを99列と100列の境界とした。グリッ

ド名は例えばB A99となる。

調査の結果、B区で柱穴、C区では2軒の竪穴住居址、E区で多数の弥生時代から古墳時代にかけての遺物が検出された。

試掘調査の結果に基づき、長野県教育委員会文化課の指導を受け、6月5日よりB・C・E区について本調査を実施した。この結果、C区で弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址4軒、中世に属すると思われる遺構及び土坑5基を検出し、またE区では土坑58基と溝跡等を検出した。これらについて写真撮影・測量調査を行ない、6月23日一旦調査を終了した。

この際竪穴住居址検出地区に隣接する宅地について調査が未了であったため、都市計画課と再度協議を行ない、改めて9月21日から10月14日、12月21日から25日の両度にわたり、C区の発掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址4軒が確認された。

調査終了後引き続き飯田市考古資料館において、遺物水洗・注記・接合・復元・実測作業ならびに現地で記録された写真・図面類の整理を行ない、昭和63年3月末まで報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之

作業員 木下当一 細田七郎 高橋収二郎 木下傳 藤本幸吉 小室幸充

木下和子 横井近枝 溝上清見 大島利男 平沢今朝光 高木義治

森章 庄田多久三 松下真幸 吉川正実 向田一雄 正木実重子 武田恵美

佐々木啓 福沢トシ子 村沢愛藏 柳沢謙二 池田幸子 大日方富士子

廣沢古千代 川上みはる 木下玲子 柳原勝子 小平不二子 吉沢佐紀子

丹羽由美 牧内八代 松本恭子 宮内真理子 吉川悦子 吉川紀美子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

塙沢正司 (社会教育課長)

池田明人 (社会教育課文化係長)

小林正春 (同上 文化係)

吉川 豊 (同上)

馬場保之 (同上)

土屋敏美 (庶務課)

(馬場保之)

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市はもちろん、伊那谷全体にわたる地形は、東西を伊那山脈と中央アルプスにはさまれ、その中央部を天竜川が南流し、その両岸は発達した段丘により構成されるといえる。それぞれの段丘は両側の山脈から流出する大小の天竜川の支流により分割され、支流から支流の間は独立した地形を成している。

本書に関連する丸山遺跡及び飯田市街地の立地する場所は、南を飯田松川により、北を野底川により区切られた段丘上に立地する。また、伊那谷の一般的な地形としては数段の段丘面により構成されるが、飯田市街地の立地する位置は伊那谷の他所と若干様相が異なり、飯田城跡のある段丘東端から西端の風越山麓裾部までが一連の面となっている。このことは、本来の段丘地形が存在しないわけではなく、市街地化の進行により微地形の判断が困難であることに合わせ、風越山麓からの扇状地形が発達したことによっており、上位の段丘地形はこの扇状地に覆われているためである。それらの要因により、現状では東端の段丘端部の標高500mから風越山麓裾の標高600mまでの比高差100mの間が一連の面としての地形を示している。全体として一連の地形を成す飯田市街地の立地する段丘上において丸山遺跡の位置は、段丘面上のはば中央部で若干風越山麓寄りの、風越山麓から発達した扇状地上にある。段丘上における位置からみて、丸山遺跡周辺は標高530m前後であり扇状地の先端部付近と考えられ、段丘上にみられる王竜寺川、源長川など小谷川により微地形が複雑に変化する部分である。

丸山遺跡は王竜寺川と源長川の谷にはさまれた間にあり、全体的には起伏に富んだ微地形となり、丘陵部と凹地が連続して認められ、凹地部においては小湿地の発達した場所もあり、断続的に湧水地の存在も知られる。

また丸山遺跡は扇状地上に立地することは先記のとおりであるが、風越山麓裾部からの距離は500m前後あり、自然災害は通常受けにくい場所といえ、総合的な自然条件下においては、古くからの生活適地であったといえる。

2. 歴史環境

本遺跡周辺にかかる歴史環境としては、近世幕藩制の中で発展した飯田城下に隣接し、かつそれと直結した農村地帯としての位置づけが最も強く示される。

しかし、自然環境で記したとおり、丸山遺跡一帯の自然条件下においては、原始・古代におい



1 丸山道路 A 押洞道路 B 正永寺原道路 C さつみ道路 D 権現堂前道路
 E 古屋垣外道路 F 赤坂道路 G 宮崎A道路 H 宮崎B道路 I 大門原B道路
 J 大門原D道路 K 飯田城跡

插図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

て連綿と続く人々の生活があったことは否定できず、市街地化の進行する中で遺跡の具体的な状況を判断できる材料は少ないが、飯田市街地の立地する段丘上の隨所にその痕跡を見い出すことができる。

考古学分野における飯田市街地の立地する段丘上で最も古い人々の生活痕跡としては、昭和61年に行なわれた飯田城跡の発掘調査により発見された細石核であり、将来において更に古い先土器時代まで遡る可能性もある。

縄文時代としては、風越山麓の山裾部に点在する正永寺原・押洞などの諸遺跡から早期の押型文土器も出土している。また、前期以降晩期に至る縄文時代全体を通じて微地形の変化によりその立地条件は多種・多様であるが、ほぼ全域に分布している。縄文時代の遺跡分布の主体は、本遺跡も含む風越山麓寄りにあるが、古くからの市街地の一画である大門町にも縄文時代中期中葉の住居址が確認された事実もあり、古くからの市街地の地下にも縄文時代の人々の生活した痕跡の存在する可能性は強いといえる。

統く弥生時代から古墳時代にかけては、自然環境で触れたように風越山の裾部及び崩壊部付近で発達する湧水に拠る水田經營が随所にあったことが予想され、羽場地区の椎現堂前遺跡や本遺跡ではかなりの規模で集落が形成されていた事実もあり、既出の断片的な資料によっても上飯田地区のほぼ全域が弥生時代から古墳時代における安定した生活地であったといえる。

なお、古墳時代については、その時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも數基の古墳の存在したことが伝えられており、市街地化の進行により残存するものは無いが、古墳時代の総合的な様相としては、市内竜丘地区や座光寺地区などと同様の姿があったと考えられる。

統く奈良時代から平安時代の状況はまったく不明であるが、古墳時代に立脚した集落の存続は当然考えられる。

中世に至って、それぞれの詳細な初源期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂などに山城が造られ、一定の集団による生活の営みがあったことを推し計ることができる。

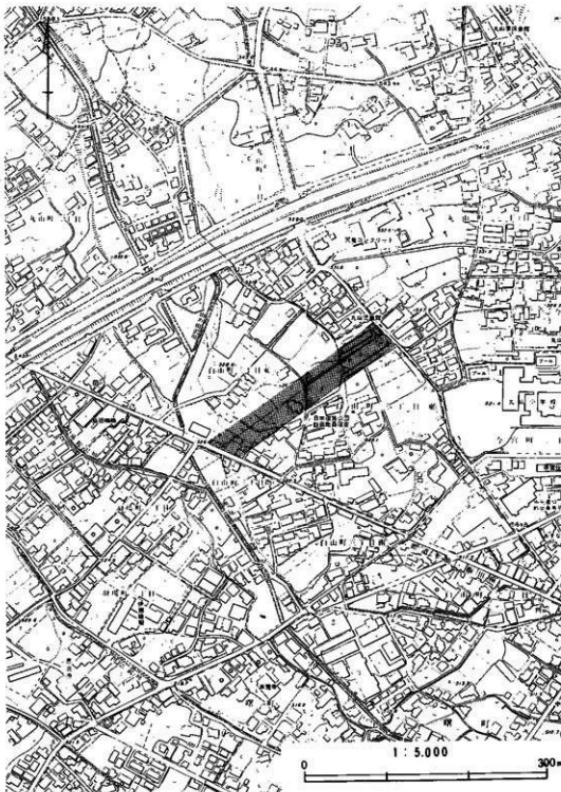
なお、現在ある飯田市の成因は、近世における飯田藩主京極・鍋坂・堀氏の居城である飯田城に起因した城下町の形成によるわけであるが、その地形的な特色である段丘地形により、一般的な城下町とは異なったあり方を示している。飯田城は段丘東端の最も標高の低い部分に位置し、標高の高い西方部分に城下町が形成されている。

飯田城に関する城下町が西方に発達したのは、東方の段丘下段までの比高差が約70mと急激であり、かつその部分は天竜川支流の飯田松川と谷川の合流点であり、常に水害等の影響を受ける氾濫原であったためと考えられる。

以上のように丸山遺跡周辺は、近世以降においては飯田市街地を主とすればその従的位置づけがされがちであるが、縄文時代から中世に至る人々の生活した大半の時代において飯田台地上

における主体的な役割を果して来た地であるといえる。

(小林正春)



挿図2 調査位置及び周辺地図

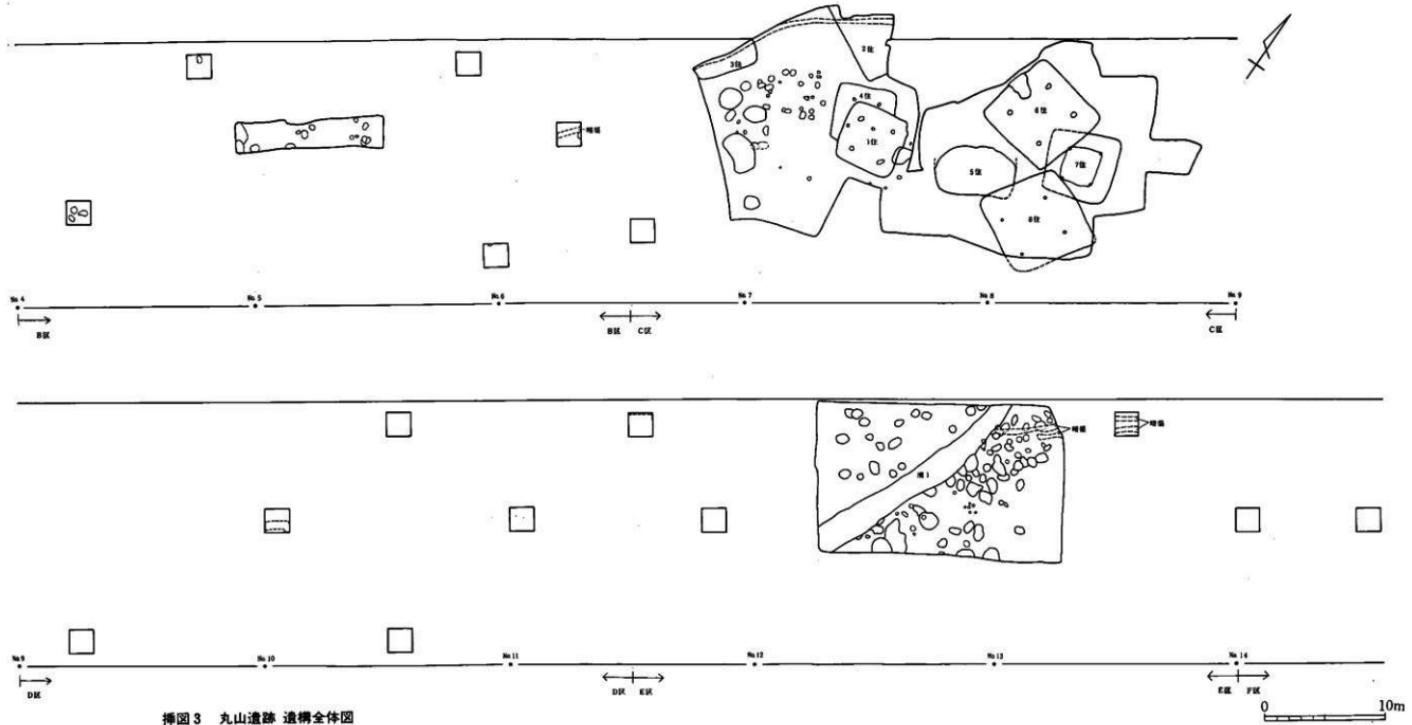


図3 丸山遺跡 遺構全体図

II 調査の結果

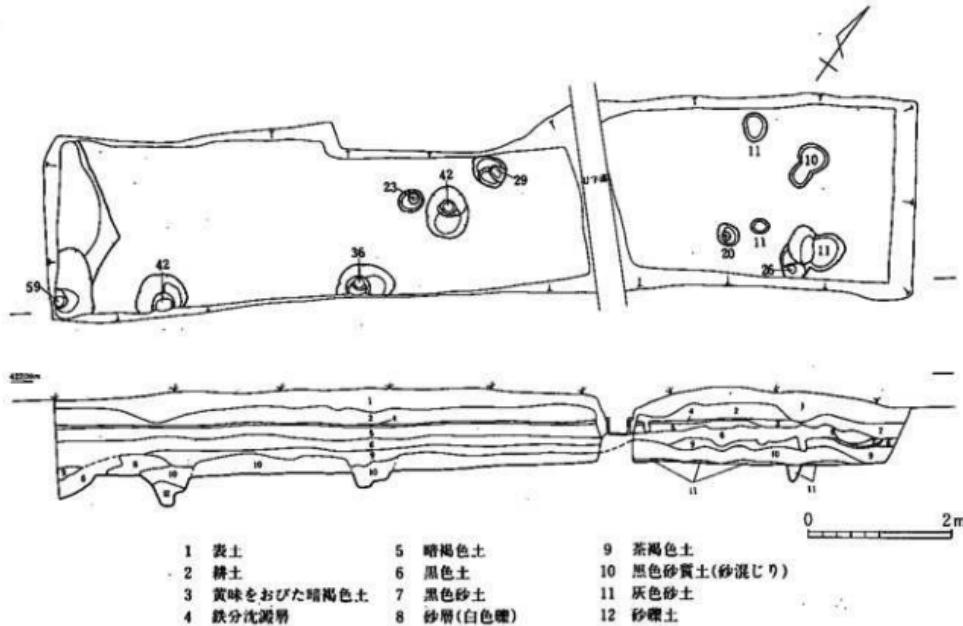
1. B 区

1) 柱穴

B J 98からB O 98の幅2m、長さ12mのトレンチ内に不規則ではあるが小穴がみとめられたためBNおよびBOを西北側へ拡張した。

検出した小穴は11個、どれも梢円形から円形を呈し、中には底部に柱痕とみられる凹みを持つものもある。深さは10~51cmと差があり、それぞれの関連性も不明であり断言できないが、建物址に關係する柱穴と考えられる。

黒色砂土の覆土からは遺物の出土はなく、時期の特定は困難であるが、C区にみられる中世の



挿図4 MRY B区柱穴平面図

生活面との関連も考えられる。

2) その他

B W98で乱雑に石を入れた暗渠排水を確認した。これはC区3号住居址の上部で確認したものへ連続する可能性が強い。

形態は、灰白色砂層を掘り凹めその中に石を投げ込んだだけのものであり、他の暗渠が石を組んだものであるのに比べ、雑な作りである。

遺物としては、B H95から灰釉陶器片と土師器片が出土しているが、遺構に伴なう遺物とは考えられない。

(吉川 畏)

2. C 区

1) 壁穴住居

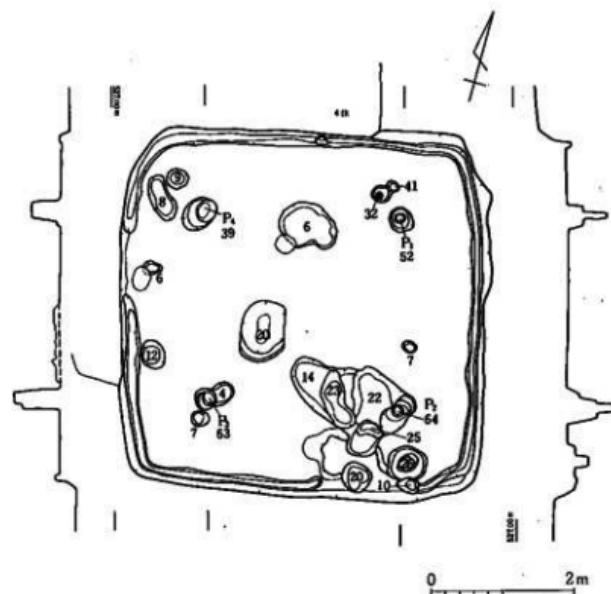
① 1号住居址（挿図5、第1・2・6図）

C J 98中心に検出し、弥生時代の4号住居址を切っている。5×5 mの隅丸方形壁穴住居址で主軸はN 16°Wと推定される。覆土は黒褐色砂土であったが、表土から検出面まで浅く覆土中に搅乱があり、中世から現代の陶器片が入っていた。壁高は20~35cmあり下部は比較的急に立ちあがる。上部の傾斜が緩いのは砂質土の為に崩れたと考えられる。床面は土質が軟らかく繋っていない。主柱穴は4本であり、不整円形で直径30~40cmとやや小形である。穴の深さは40~60cmでP₄がやや浅い。炉址は確認できなかったが、北側主柱穴間中央床面に炭の散布が見られ、やや凹んでいた。焼土の確認はできなかったが、位置から炉址と推測される。周溝はほぼ全周し、深さは3~9 cmであった。

遺物は土師器壺・壺・高壺・壺・鉢・須恵器壺、石器は打製石斧・有肩扁状形石器・砥石が出土している。土師器壺には精製と粗製があり、壺は粗製のみである。大形の壺には内外に刷痕が残っている。高壺には精製と粗製があり、第2図4は精製で、壺部に凸帯の棱が付き脚部が八の字に開く。壺部内外に暗文があり脚部は箆ミガキがなされる。6は粗製で壺部がやや外反し、脚部は細く下部が平らに折れ、箆ミガキは施されていない。器台7は4孔で脚部は八の字に開く。鉢形土器（第1図9）は精製で粘土も良く薄く仕上げられており、内外面に箆ミガキされており、内面に暗文が施されている。壺は3個体あり、内面に箆ミガキがあるが成形は難である。須恵器壺は胴上部片だけであり、全体形が確認できない。有肩扁状形石器の刃部にはロー状光沢がある。器台及び有肩扁状形石器は4号住居址に属する可能性が強い。

時期は出土土器
から古墳時代前期
から後期への移行
期に位置づけられ、
須恵器が当地方へ
伝えられた頃と判
断される。また、
地床炉と判断され、
カマド出現前の段
階であり、土師器
の時代と一致した
様相がうかがえる。

(佐々木嘉和)



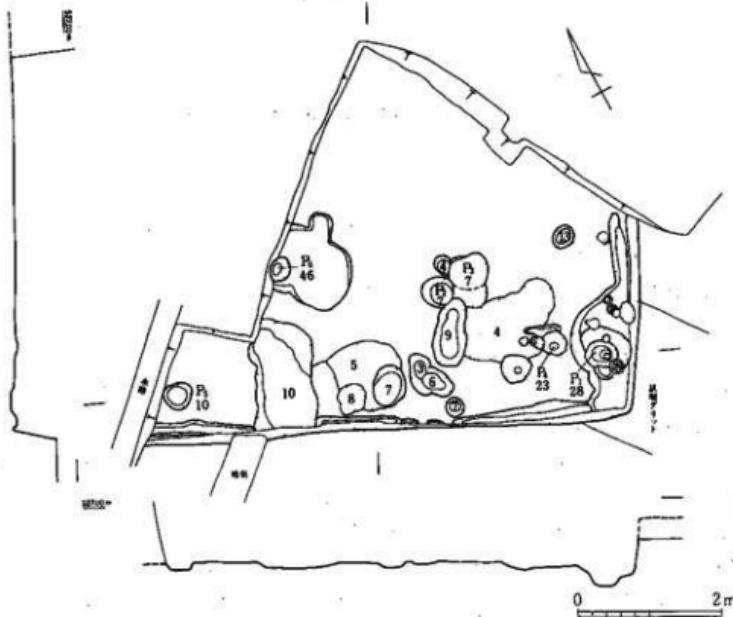
挿図5 MRY 1号住居址

② 2号住居址（挿図6、第2・3・6図）

C区調査範囲の西側CJ49グリットを中心に検出した。1号・4号住居址の北西に位置し、暗渠排水が覆土中に存在した。北側が調査範囲外となるため規模は不明であるが全体の1/4程が調査できたと思われ、方形竪穴住居址と考えられる。南東壁2.7m・南西壁6.8mを確認し両壁ともさらに調査範囲外へ延びている。カマド等が未確認のため確実でないが、確認した南西壁の中程壁下に入口施設と考えられる部分があり、南西壁一辺は7.6m程を測り、主軸方向はN26°Eを示しているものと判断される。覆土はほとんどが砂質の暗褐色土で、漆黒色土が壁面から床面上に添って認められるレンズ状の堆積を成している。南隅を中心に炭化材が出土し火事の住居址である。壁は深さ50~60cmを測り、垂直に立ち上がる。隅の部分も直角に検出され当時の掘り込みを状態良く残している。周溝は壁直下に確認され深さ2~16cmを測る。床面は砂質土中に造られているためきわめて軟弱である。住居址内に検出した穴はP₆を除いて浅く精査したが主柱穴は確認できなかった。本址に伴う穴として南隅の周溝が幅広くなった部分に確認された深さ28cmを測るものがある。本址より出土した完形品のうち壺1個を除いてすべてこの穴からで、壺4個は

重なったままの状態で出土した。また長さ40cm・幅11cm・厚さ10cmのカマボコ状の黄色粘土も出土しているが焼かれたものではなく用途は不明である。南西壁下のほぼ中央に確認された深さ5cmの凹み部は周囲に2・3cmの低いが土手状の高まりが認められ入口施設と考えられる。

遺物の出土量が多い。土師器壺4個のうち第2図8と9は完形品で前者はヘラミガキ後者はナデ整形で仕上げられ、両者とも外面にススが付着している。10は二次焼成を受け外面が剥離しており、口縁部で1/4残存している。13は1/4残存する底部でリング状の粘土をはり付けて底部を作っている。いずれも胎土中に小石粒、雲母を含み焼成は良好で、色調は薄い茶色を呈している。壺は2点ある。11はいわゆる壇型の完形品でヘラミガキにより仕上げられ胎土中に小石粒を含み雲母が混入する。焼成は良好で色調は茶色を呈している。12は有段口縁の頸部で1/4残存する。小石粒を含み、薄い橙色を呈するもので軟らかい土器である。14は壺の完形品で口縁部をつまみ上げている。底部にクシ状工具の調整痕を残しナデ整形である。焼成は良好、色調は茶色を呈し、胎土中に石粒、小石粒、雲母が含まれている。壺は5点ありみな完形品である。第3図3は底部をクシ



插図6 MRY 2号住居址

状工具で調整し口縁部に稜を持つ。5は底部をへら調整し短く外反する口縁部で内面に暗文が施されている。3・5とも胎土中に小石粒・雲母を含み焼成は良好、色調は明るい茶色を呈している。4は器高が低く口縁部に稜を持ち端部を丸く仕上げ内面に暗文を施す。胎土中に小石粒・雲母が混入し焼成は良好、色調は茶色である。1はヘラミガキ整形で胎土中に小石粒を含み色調は薄い橙色を呈する。2は明るい茶色の色調を呈している。1・2とも焼成は普通であるが1は器壁の厚さが均一でなく2は胎土中に石粒が多量に混入したかの如に比べ粗い造りのものである。9は須恵器罐の模倣品で頭部中程に稜を持ち暗文を施している。胎土中に小石粒・雲母を含み色調は茶色である。高杯は3点あり8は%残存する杯部で、胎土中に石粒・小石粒を含み焼成は良好である。6の杯部は内外面とも暗文が施され微小石粒を含む7の脚部と同一個体の可能性があるが杯部に含まれない赤粒が認められるため別個体とした。高杯はみな薄い茶色の色調で焼成は良好である。須恵器には%残存する罐10が1点あるのみで破片すら出土しなかった。頭部に稜が二段あり稜の下部を細かな波状文で埋めている。肩部に有孔を持ち浅い沈線と波状文が見られる。胎土中に黒粒を含み、焼成は良好、色調は灰色を呈している。石器として砾石5点があり12は両面に突孔痕があるが破損し貫通していない。ほかの4点は自然石をそのまま利用したもので図化しなかった2点は礫物石状のものである。ほかに白玉1点と鎌と思われる鉄器1点がある。また第2図14の境内の土に炭化米1粒が残っていた。

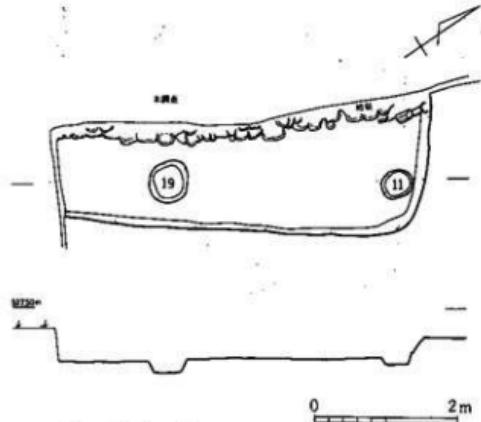
出土土師器及び須恵器から1号住居址と同時期かそれに続く位の古墳時代前期から後期への移行期と考えられる。

(佐合英治)

③ 3号住居址

(挿図7)

C区調査範囲の西隅C
D96を中心検出した。
西侧は調査範囲外となり
調査地の境で暗渠排水に
切られている。北西側が
ほとんど用地外となるた
め全体規模は不明の隅丸
方形窓穴住居址である。
確認した壁は北東1.7m
南東4.8mを測り、南東
壁方向軸N38°Eを示す。



挿図7 MRY 3号住居址

覆土は砂質の暗褐色土の一層で堆積層は把握できなかった。壁面は比較的ゆるやかに立ち上がり25cmを測る。床面はいわゆるタタキ状の面は確認されず砂利混りの砂土層が露出した。主柱穴、周溝等は確認されず、検出した穴も浅く遺物の出土もないため本住居址に伴なう施設であるかも不明である。

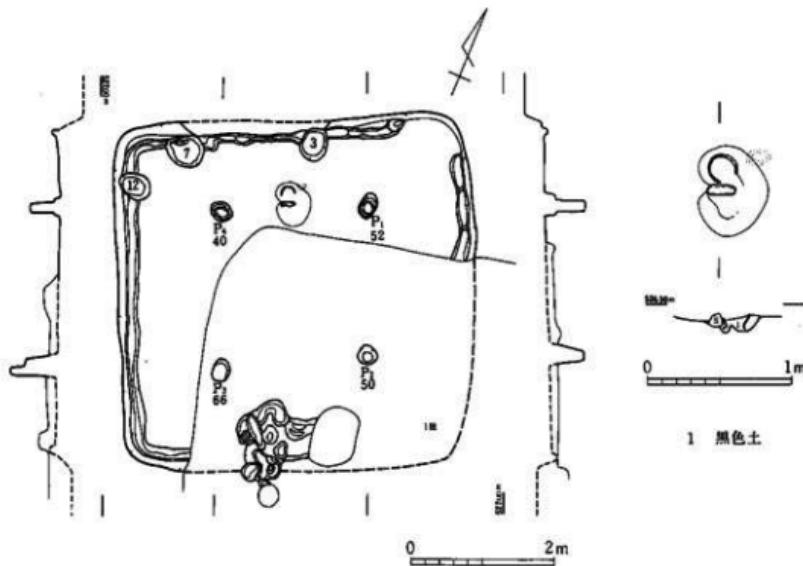
遺物の出土量はきわめて少ない。固化できない小破片が数点のみで土師器片のはか陶器、磁器片もある。

時期は遺物から判断できないが確認された周囲の造構、住居址形態から考えると古墳時代と思われるが確証は得られなかった。

(佐合英治)

④ 4号住居址（挿図8、第4・11図）

CJ97を中心に検出した。東側約1mを1号住居址に切られるため確認できない部分があるが、



挿図8 MRY 4号住居址

推定 5.0×4.8 m 隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向は N $24^{\circ}W$ を示す。壁は 13cm で比較的急角度に掘られており、北隅をのぞく壁直下に幅 8~20cm・深さ 1~9cm の U 字形に掘られた周溝が確認された。北東の周溝は小さな穴を伴なっている。床面は 1 号住居址に切られた部分以外は、良好な貼床がなされていた。柱穴は 4 個を確認、うち 2 個は 1 号住居址の床下から検出した。4 個いずれも長径 30cm 前後の楕円形で P_2 を除いてはすべて二段の掘り込みになっており、最深部は床面から 40~60cm を測る。炉は P_1 と P_4 のほぼ中間部やや壁よりにあり、甕上部を逆位に埋めた土器中にも、周辺にも焼土はみとめられなかった。1 号住居址に切られた東南の壁と考えられる部分中央部で、1 号住居址の床下に不整形の落ち込みがあり、入口施設と考えられる。

出土遺物としては、炉に使用されていた甕（第 11 図 12）の他内外面ヘラみがきを施した甕の胸部や S 字状口縁を持つ台付甕の口縁部（第 4 図 2）と脚部（同 3）、土師器甕の口縁部、土師器の手づくね（同 4）、有抉打製石庖丁 2 点が出土している。また 1 号住居址内から出土した遺物中にも本址に関連するものがある可能性も強い。

時期は弥生時代終末ないし古墳時代前期初頭に位置づけられ後者に属する可能性が強い。

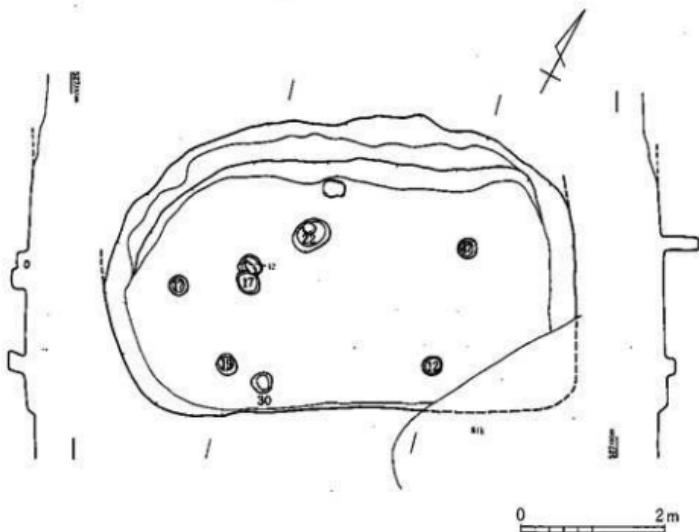
（吉川 豊）

⑥ 5 号住居址（挿図 9、第 6 図）

C O99 を中心に 8 号住居址に切られ、1・6 号住居址に隣接して検出された。全体が調査されたが、二度にわたる調査の結果、検出状況に差がある。平面プランは不鮮明であるが、不整隅円方形を呈すると思われる竪穴住居址で、規模 $6.5 \times (4.0)$ m を測る。しかし東西方向の規模が著しく短く、両壁の検出状況に疑問が残る。主軸方向は不明であるが長軸方向に関しては N 62° E を示す。検出面から床までは浅く、壁はだらだらと落ち込み、壁から床にかけ全体を叩いている。周溝は検出されず、また本址に付属する小穴 8 ケのいずれが主検穴であるか特定することは困難であった。炉址や入口施設等に関しては不明である。覆土はほとんど単一の黒色砂土で全体がかなり柔かい。遺物は古墳時代前期のものがほとんどであるが、陶磁器がわずかに出土している。

本居址出土遺物は図示できるものではなく、S 字状口縁の台付甕の他、土師器甕・壺・高壺・器台の破片、鉄製品（第 6 図 10・11）等少量の遺物がある。

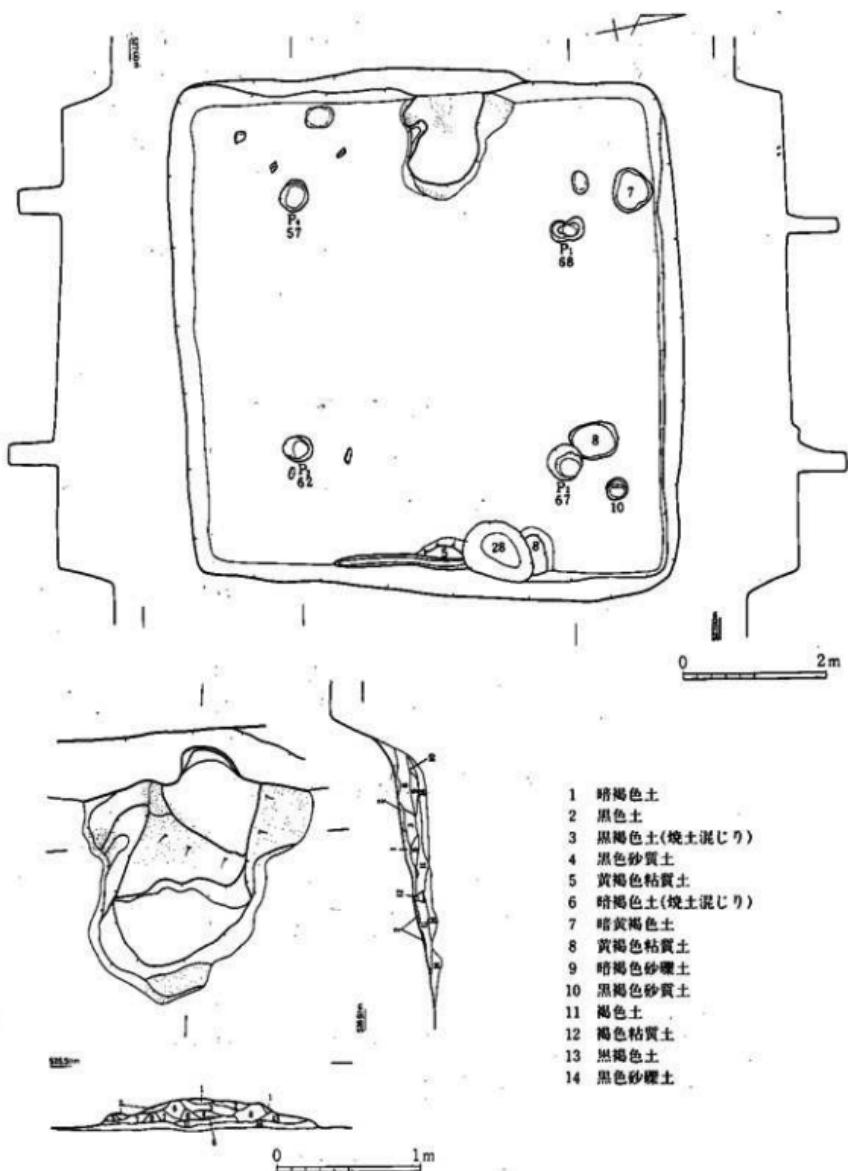
覆土の状況から比較的新しい時代の遺構と考えられ、出土遺物の大半は古墳時代のものであるが、当方他遺跡の調査例に長方形で浅い掘り込みの中世に属する遺構が類例としてあり、断定はできないが本址も中世に属する可能性がある。



挿図9 MRY 5号住居址

⑥ 6号住居址（挿図10、第4～6図）

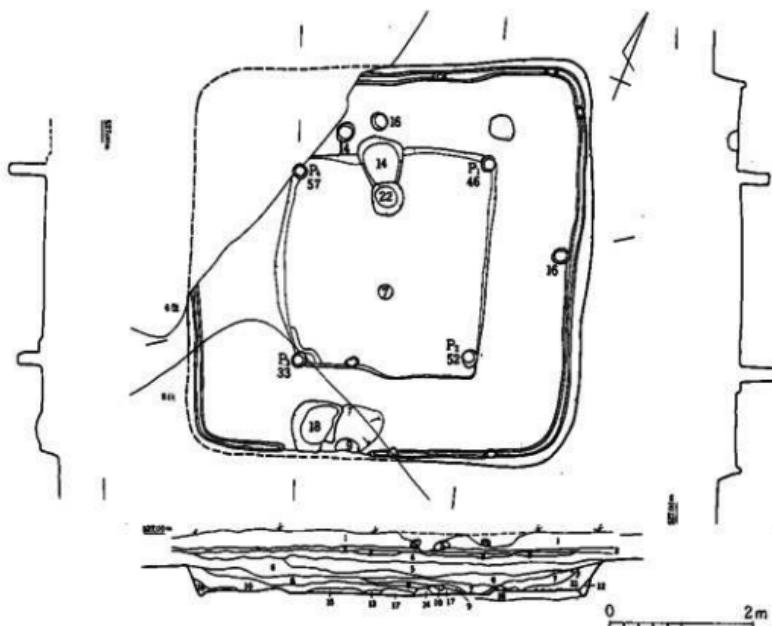
C Q97を中心にして、7号住居址を切り、5・8号住居址と近接して確認され、全体を調査した。隅丸方形を呈する規模 $6.9 \times 7.0\text{ m}$ の大型の竪穴住居地で、主軸方向 N 78.8° W を示す。床面は全体的に柔らかく掘り方を確認したのみで貼り床等本来の床面は一部確認したのみである。なお、カマド断面から灰褐色砂利層まで掘り込んだ後黒色砂礫土の貼り床がなされたことが判明した。壁高は検出面から $60\sim70\text{ cm}$ を測り、急に立ち上がる。北壁中央は図上ではややだらかになっているが、掘りすぎによるもので本来急な立ち上がりを示す。周溝は貼り床での確認ができず掘りすぎたため、東壁中央壁下のみ検出したにとどまるが、幅 15 cm 程のものがほぼ全周していたと考えられる。主柱穴は P₁～₄ の 4 本で柱掘り方は径 $40\sim50\text{ cm}$ の円形を呈し、深さ $57\sim68\text{ cm}$ を測る。東壁中央やや北寄りには深さ約 30 cm の楕円形の穴が掘り込まれ、さらに土手状縁部が検出され入口施設にあたると思われる。西壁中央に位置するカマドの原形は不明であるが、壁の中程以下に焼土・粘土があり、石を用いない粘土カマドと考えられる。左袖に土師器壺・高坏片等が敷かれしており、カマドを修復したものと考えられる。西壁を幅 40 cm 、奥行 20 cm 掘り込んで煙道が確認された。南西隅付近に高坏・壺等が集中しており、また壁際に粘土塊が残されていた。南東隅から砥石・高坏脚部が、北壁下やや西寄りから鐵鎌が出土した。また入口部穴内に土師器壺片の他 7 号住居址から打製石磨丁が落ち込んでいた。



插図10 MRY 6号住居址

本住居址出土遺物には、土師器壺・壇・壠・坏・台付壺・高坏、砥石、鐵鎌の他、覆土上層遺物として、須恵器罐・土師器高坏脚、中近世の陶磁器片、チャート製石鎌、打製石庖丁等がある。第4図12の壇は横ナデの後縦位の細かい竪ミガキが施される。13は竪ケズリで整形後ナデが施されている。6は口縁部に横ナデ、以下クシ状工具による調整が施される。口縁部にススが付着し内面に接合痕を残している。第5図1はクシ状工具による整形後ナデが施され、脚内部にハケ調整痕を顕著に残す。3・5・6・9には竪ミガキが施される。

出土遺物及び初源期と考えられるカマドの存在等から本住居址は古墳時代後期前半に位置づけられる。



挿図11 MRY 7号住居址

⑦ 7号住居址（挿図11、第5図）

C S 99を中心いて、6・8号住居址に切られて検出され、全体を調査した。規模 $5.4 \times 5.5\text{ m}$ の隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向 N 20°W である。堅いたたき状の貼り床で、壁から 100 ～ 120cm 内側でさらに 10cm 程深く方形に凹むが、東壁側は若干浅い。黒褐色砂質土まで全体を掘り込んだ後、厚さ 10cm 程の床が貼られている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高はおよそ 40cm を測る。壁下に幅 10cm 程度の周溝が設けられ、内部に 4 個の小穴が確認された。配置に規則性は見出せず、さらに複数個の小穴があった可能性もある。周溝埋土は黒色の細かい土である。主柱穴は方形凹み部の四隅に掘り込まれており、径約 20cm、深さは 33 ～ 57cm である。 P_3 の周辺が若干凹んでいる。東壁中央やや寄りに二段構造状の穴が確認され、土手状縁部が存在したかどうかは 8 号住居址との重複関係のため不明であるが、入口施設と考えられる。中央西壁に寄った位置に不整円形を呈する 2 個の穴があり、双方とも焼土は検出されなかったが、位置等から地床炉と考えられる。この北側床面より壺底部・高坏の他偏平な台石が、また中央凹部から壺・高坏々部が出土している。

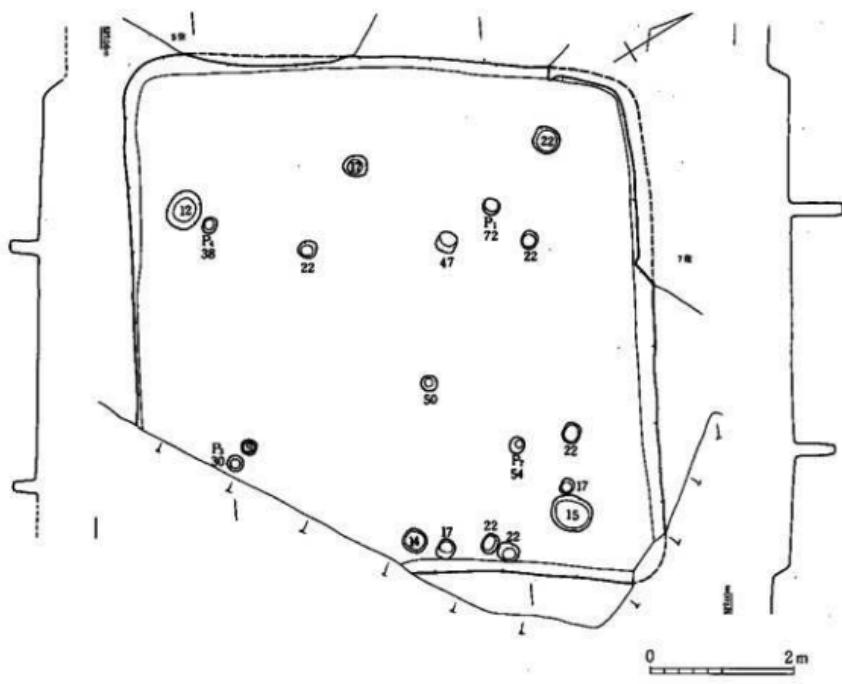
本址出土遺物には土師器壺・壺・高坏の他、縄文土器片、弥生土器壺・壺、打製石庖丁、灰釉碗底部片、中世陶器小片等が出土している。第 5 図 12 は外面にハケ調整が施される。13 は外面に荒い箆ミガキが認められる。15 は底部に調整痕を残し、内面が剥離している。壺 16 は外面に箆ミガキが施される。

本址出土遺物には他時期の混入品はあるが、弥生時代後期的な住居址形態や、出土遺物の総体的な状況から弥生時代から古墳時代への移行期に属するといえる。

⑧ 8号住居址（挿図12）

C R 102を中心いて、5・7号住居址を切り、6号住居址と隣接して検出された。プランは不明瞭であったが、東辺両隅の一部を除いてほぼ全体を調査した。規模 $7.3 \times 7.1\text{ m}$ の不整隅丸方形を呈する大型の竪穴住居址で、主軸方向は不明であるが、長軸は N 34.5°E を示す。6号住居址と同様床面は柔らかく、灰褐色砂利層まで掘り込んだ後、黒色砂礫土の貼り床がなされている。壁高は検出面から 8 ～ 37cm を測るが、床面レベルでは高低差はさほどなく、わずかに東壁側にゆるやかに傾斜している。壁体はあまりしっかりしておらず、ややゆるやかに立ち上がる。主柱穴は P_1 ～ P_4 の 4 本で、径約 20cm の円形を呈し、深さは 30 ～ 70cm を測る。柱穴埋土は黒色土ないし暗黄褐色砂質土である。土師器壺小片の他、縄文時代後期浅鉢小破片が混入出土した。

時期は出土遺物等から古墳時代前期終末から後期初頭が考えられるが、炉址・カマドが確認されておらず、出土遺物もきわめて少なくかつ小破片であり、詳細時期は不明である。



插図12 MRY 8号住居址

2) 土 坑

① 土坑59（挿図13）

土坑61の南東に検出された。規模 $125 \times 110\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑で深さ 40cm を測る。壁はやや急に立ち上がり、断面逆台形の掘り方である。

土師器壺等が出土しているが、いずれも小破片で、詳細時期は不明である。

② 土坑60（挿図14）

1号住居址を切って検出された。規模 $140 \times 110\text{cm}$ で不整方形を呈し、深さ 21cm を測る。壁はややゆるやかな立ち上がりを示し、断面逆台形を呈する。

1号住居址北側の中世と考えられるたたき状の面を切っており、中世以降の時期が考えられるが、詳細時期は不明である。

③ 土坑61（挿図13）

柱穴に切られて確認された。確認した一辺は 330cm 、深さ 116cm を測るが、調査の結果いわゆるロームマウンドであることが判明し、完掘しなかった。縄文時代晚期の条痕文土器片、土師器壺片等が出土している。

④ 土坑62（挿図13）

土坑61の北側で検出された。 $190 \times 135\text{cm}$ の平面舟形を呈する土坑で、主軸方向 N 54.5° E を示す。深さ 27cm を測り、断面逆台形をなす。詳細時期は不明である。

⑤ 土坑63（挿図13）

土坑62の西側で確認された不整円形を呈する土坑である。規模 $180 \times 175\text{cm}$ 、深さ 21cm を測り断面逆台形で壁はゆるやかに立ち上がる。本址の時期決定は困難である。

3) 柱 穴 （挿図13）

1～4号住居址の両側に隣接して径 $20\sim40\text{cm}$ 程度、深さ $10\sim30\text{cm}$ の柱穴が検出された。特に C F96、C H96・97付近に集中がみられ、中に平面形・埋土等が類似するものがあることから、掘立柱建物址などの何らかの施設を構成した可能性もある。いずれの柱穴からも遺物は出土しておらず、詳細時期等不明である。

（馬場保之）

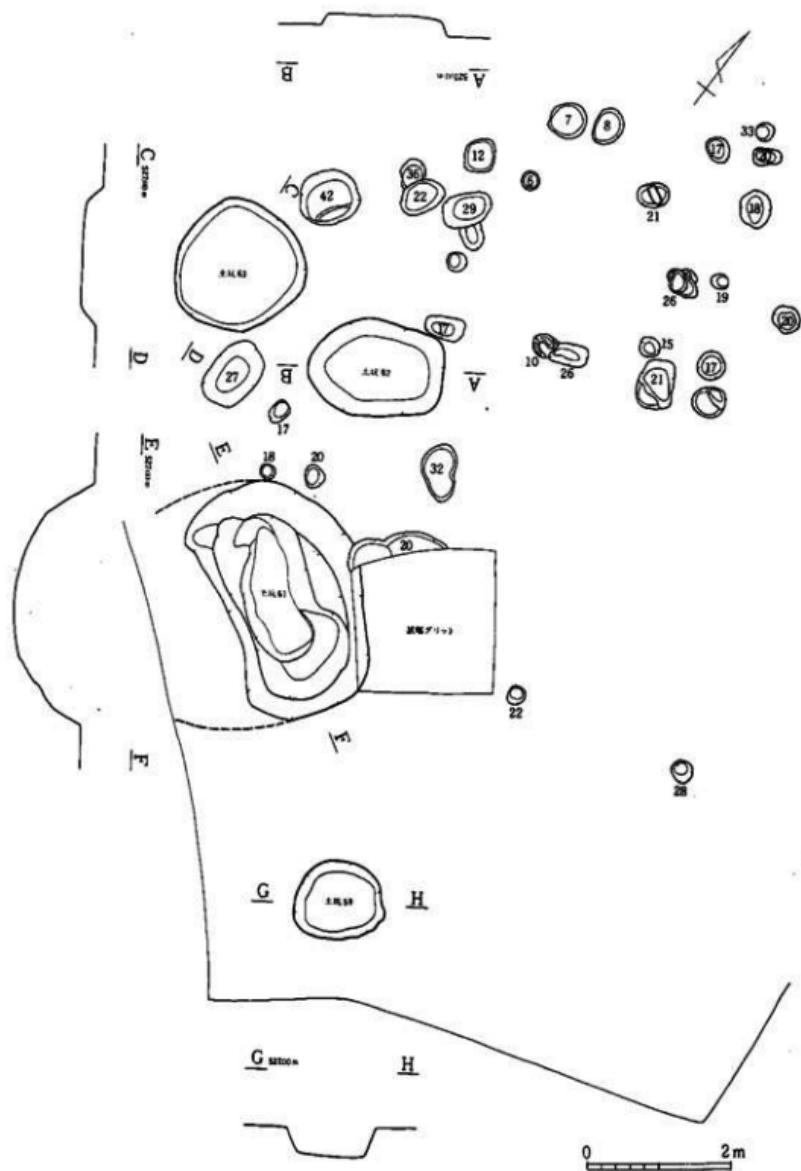
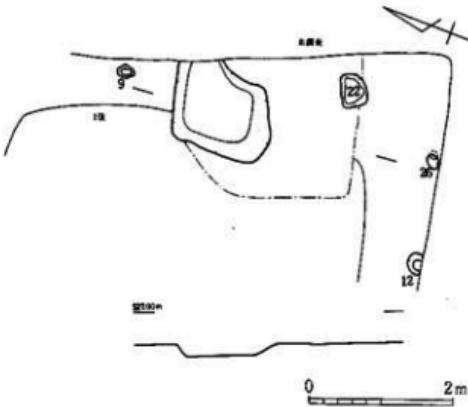


図13 MRY C区土坑59-61-62-63, 柱穴平面図

4) 暗渠排水（挿図4）

C区調査範囲の西側CC95～C
K93グリットに検出した。2号・
3号住居址を切る。北東・南西方
に向かって長さ16mを確認した。現在の
畑と水田の境にある用水路にそっ
て曲がっており、南西に向かって
傾斜している。用地外にかかるた
め調査できたのは8m程である。
幅45cm、深さ20～30cmの掘り方内
に径20～30cm程の花崗岩自然石を
2列に並べ割石を蓋石
にしている。側面及び上部を小拳
ほどの石で補強しているが粘土は
確かめられない。暗渠内の覆土は泥と砂が層を成していた。



挿図14 MRY C区土坑60

本址の時期を決定する遺物の出土はなかったが現在の田畠の用地境にはぼそって造られており
近世から現代までに位置付けられるが詳細時期は不明である。

（佐合英治）

5) その他の

① 焼土散布地

1号住居址の南東側約2m離れた暗褐色土中に径50cm位の範囲に厚さ5cm程の焼土が検出され
その周囲に径2cm程の範囲に焼土粒の散布する場所があり、住居址等の遺構が存在すると予想さ
れた。遺構検出時に山茶碗の約36個体の出土があり遺構の把握に努めたが、竪穴住居址等の把握
はできなかった。西側隣接して検出された柱穴群となんらかの関連を持つ中世の生活面があ
ったと判断される。

出土遺物は遺構検出時に出土した山茶碗1点（第8図14）があり、他は縄文時代晩期・古墳時
代後期土師器の小破片のみで、山茶碗により時代が特定される。山茶碗の胎土は良好であるが燒
成は悪い。糸切底部に高台を貼った痕跡があるが、高台はすべて剥落している。

② たたき状生活面

1号住居址の上部及び東側に、竪穴住居址の床面にみられるような硬い面が連続し、中世陶磁器の小破片が出土した。全体が砂層中にあり、硬い面の把握可能な部分も断続的であり、具体的な性格の特定はできなかった。先記焼土散布地同様に中世の生活面の一画であると判断され、更に推測すれば、礎石建物などに関連する土間部分である可能性も強い。

(小林正春)

3. D 区

1) その他の (押図4)

D区はC・E区が微高地状になっているのに対し、低く凹んでおり、旧流路にあたるためか水はけが極めて悪い。このため、明治・大正年間には幾度かわたって暗渠排水が敷設されたようであり、試掘調査の結果一部が検出された。

DK99では暗渠排水の屈折部が確認され、東及び南側へ伸びている。表土から第三層目の黒色土を掘り込んでおり、構造的には溝状に掘り凹めた両側に扁平な小兒頭大の河原石を立て、上部に同様の石を架げてさらにこの上を拳大の円錐で敷きつめている。また暗渠上部の旧耕作土の上に、厚さ65cmの近年の造成に伴なう盛土が確認された。

DC・DP104付近は地表に若干の遺物の散布が認められたが、調査区東側の日本道路公团アパート建設時に削平された土砂が盛土されたとのことで、試掘結果でも1m以上に及ぶ盛土が確認された。

D区からは弥生時代後期から近世にかけての遺物が少量出土した(第6図13)が、関連する遺構等は検出されなかった。

C区・E区にはさまれた凹地状であり、本来湿地と考えられ、弥生時代以降水田として利用されていた地区である可能性が強い。

(馬場保之)

4. E 区

1) 土 坑

① 土坑 1 (挿図15、第7図)

土坑 9 の北東で検出された。規模 $120 \times 70\text{cm}$ 、長軸方向 N 15.8°E を示す不整円形の土坑である。検出面からの壁高は 22cm でゆるやかな立ち上がりを示し、底はほぼ平坦である。本址からの遺物出土はやや多く、弥生土器壺片（第7図1）、土師器壺口縁部4片・底部1の他壺片が多い。出土遺物等から弥生時代後期ないし古墳時代前期に比定される。

② 土坑 2 (挿図15、第7図)

土坑 9 の南側で確認された不整円形の土坑である。規模 $120 \times 75\text{cm}$ 、深さ 34cm 、長軸方向 N 64°W を示す。内部は一段深くなっている。ややゆるやかに立ち上がる。土師器壺（第7図2）壺（同3）の他壺・壺の小破片が多いが、他に弥生の壺1片も出土している。

出土遺物等から古墳時代前期に比定される。

③ 土坑 3 (挿図15、第7図)

土坑 2 の南側で検出された。規模 $55 \times 50\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑で、深さ 14cm を測る。内部で一段低く凹んでおり、壁はゆるやかに立ち上がっている。土師器壺底部（第7図4）の他遺物は少なく、詳細時期は不明である。

④ 土坑 4 (挿図15)

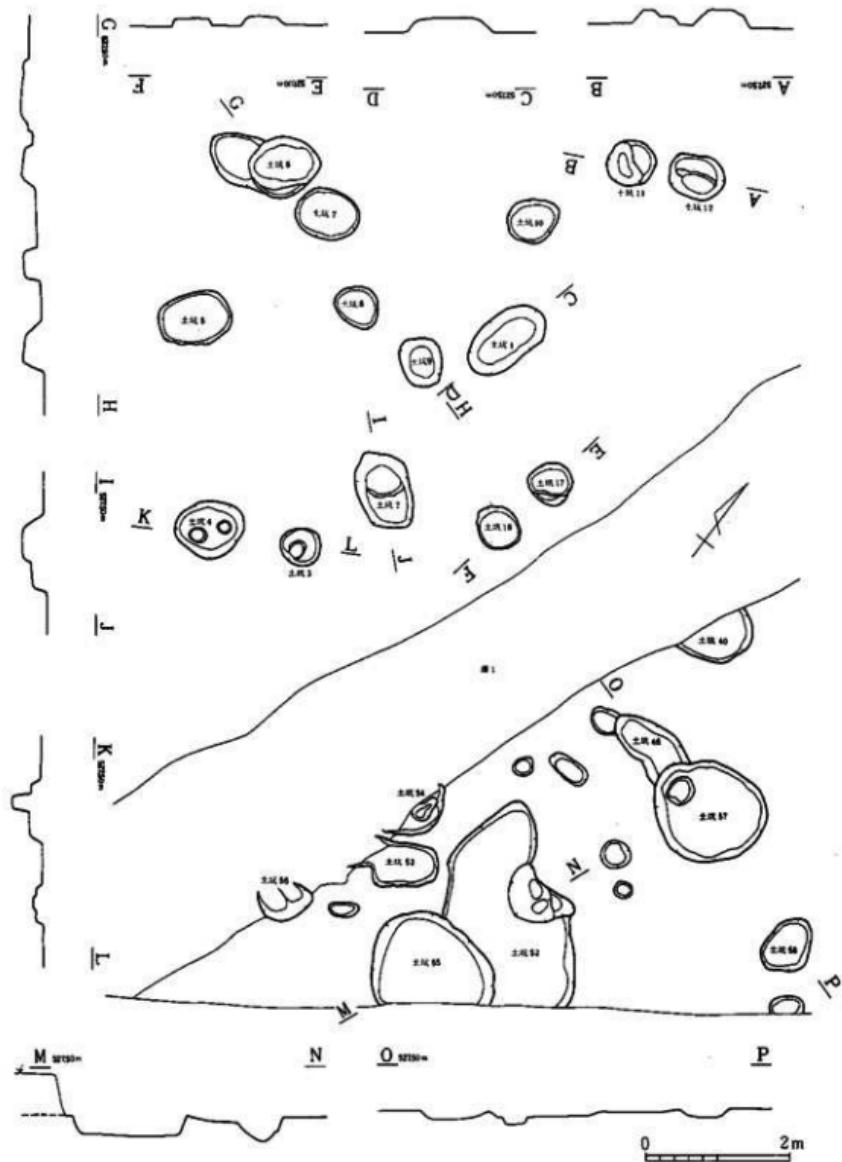
土坑 3 の南西で確認された規模 $95 \times 80\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑である。土坑内に2つの小穴が掘り込まれており、径約 20cm で深さは $38 \sim 55\text{cm}$ を測る。出土遺物は少なく、時期決定は困難である。

⑤ 土坑 5 (挿図15)

土坑 8 の南西側で検出された。規模 $100 \times 70\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑で、深さは 6cm を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、また底部はほぼ平坦である。坑内から土師器壺小片・内黒の坏等少量の遺物が出土しており、古墳時代後期に比定される。

⑥ 土坑 6 (挿図15)

規模 $155 \times 85\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑であり、深さ $13 \sim 15\text{cm}$ を測る。壁はゆるやかな立ち



挿図15 MRY E区土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・17・18・

40・46・52・53・54・55・56・57・58, 柱穴平面図

上がりを示し、東側はやや低く凹んでいる。底の状態から二つの土坑が切り合っている可能性がある。土師器壺片等3片の出土をみたにとどまり、詳細時期は不明である。

⑦ 土坑7（挿図15）

規模 $85 \times 75\text{cm}$ 、深さ 14cm の楕円形を呈する土坑で、東側が低く凹んでおり、壁はやや急に立ち上がる。遺物出土は少なく詳細時期等不明である。

⑧ 土坑8（挿図15）

規模 $65 \times 55\text{cm}$ 、深さ 27cm の不整楕円形を呈する土坑である。急な立ち上がりを示す壁をもつ断面逆台形の土坑である。本址からは弥生土器壺片1が出土したが、詳細時期は不明である。

⑨ 土坑9（挿図15）

土坑8の東側で確認された。規模 $75 \times 60\text{cm}$ の不整楕円形を呈する土坑で、検出面からの壁高は 26cm を測る。底部は平坦で、壁はやや急な立ち上がりを示す。弥生時代後期終末と思われる壺底部・坏片が覆土から出土しており、本址の時期も該期に比定できよう。

⑩ 土坑10（挿図15）

土坑8・11の間に確認された規模 $75 \times 60\text{cm}$ 、深さ 9cm の不整楕円形を呈する土坑である。底部は北側に向ってゆるやかに凹む。出土遺物は極めて少なく、時期は不明である。

⑪ 土坑11（挿図15、第7図）

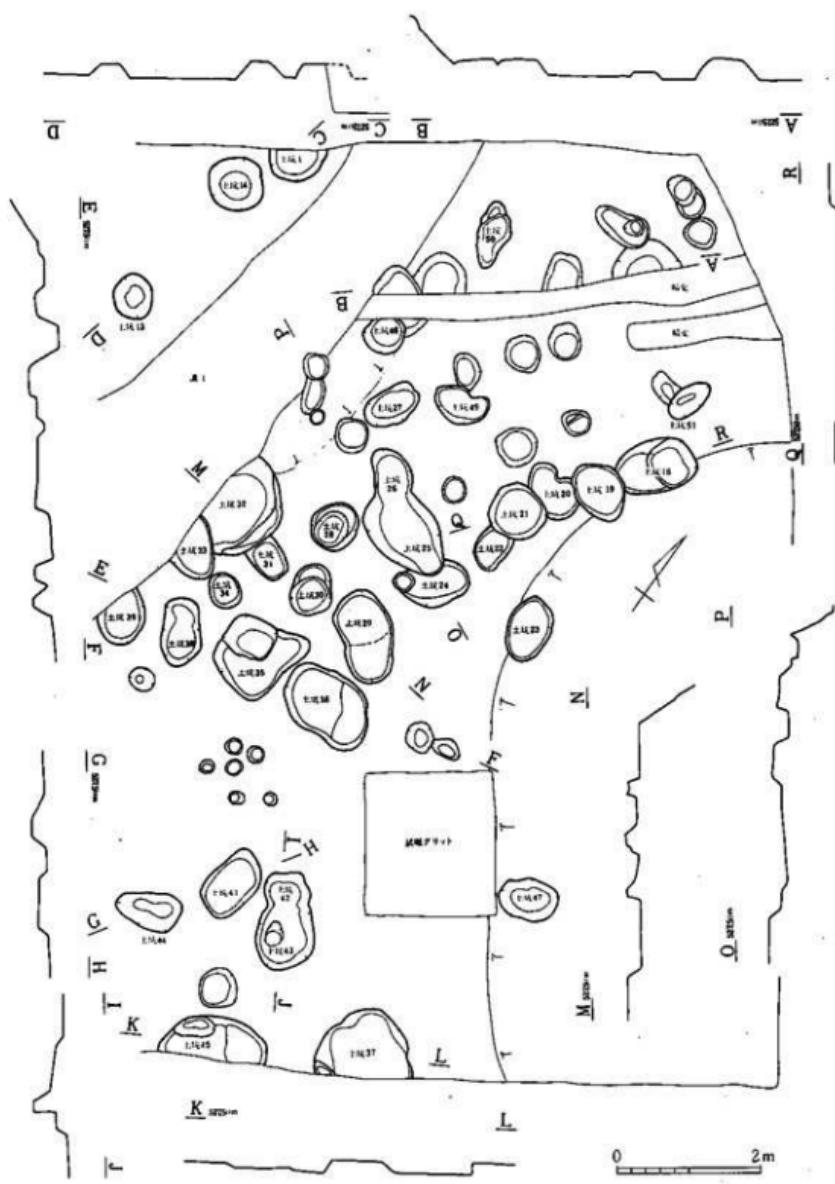
規模 $65 \times 65\text{cm}$ 、深さ 20cm の不整円形を呈する土坑である。断面はややゆるやかな立ち上がりを示し、底部が一段低くなっている。弥生時代後期の壺胴部及び土師器壺底部（第7図5）が各1片出土しているのみで、詳細時期は不明である。

⑫ 土坑12（挿図15、第7図）

土坑11の北東に検出された規模 $80 \times 60\text{cm}$ 、深さ 21cm の土坑である。平面不整楕円形を呈し、ゆるやかに掘り凹められ、さらに底部が一段低くなっている。坑内から土師器壺口縁部片（第7図6）、弥生土器壺小破片1片が出土した他出土遺物はなく、時期は不明である。

⑬ 土坑13（挿図16）

土坑12の東側で検出された。規模 $60 \times 55\text{cm}$ の平面不整円形で、検出面からの深さは 19cm を測る。断面形は壺鉢状を呈す。壺の他、壺・壺の小破片が多く、遺物の大半は弥生時代に属するが、詳細は不明である。



插図16 MRY E区土坑13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・
33・34・35・36・37・38・39・41・42・43・44・45・47・48・49・50、柱穴平面図

⑭ 土坑14（挿図16）

土坑13・15の間に確認された。規模 $75 \times 75\text{cm}$ 、深さ 21cm を測り、平面形・断面形とも土坑13に類似する。本址からは、壺片1・土師器壺片1の他小破片が出土した。

⑮ 土坑15（挿図16、第7図）

土坑14の北側で検出されたが、未調査区にかかり $\frac{1}{2}$ を調査をしたにとどまる。判明した一辺の規模は 80cm を測り、検出面からの深さ 14cm である。平面不整円形を呈すると思われ、断面逆台形の急な立ち上がりを示す。土師器台（第7図7）の他、出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑯ 土坑16（挿図16）

規模 $115 \times 70\text{cm}$ 、長軸方向N 33°E を示す不整円形の土坑で、土坑19に切られる。底部はさらに一段低く凹んでおり、検出面からの深さは最深部で 27cm を測る。若干の遺物の出土をみたが時期決定は困難である。

⑰ 土坑17（挿図15）

土坑1の南東に確認された $65 \times 55\text{cm}$ の不整円形を呈する土坑である。全体的にゆるやかに凹み内部は一段低くなっている。遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑱ 土坑18（挿図15）

規模 $65 \times 55\text{cm}$ の平面不整円形を呈し、深さ 15cm を測る。壁はやや急な立ち上がりを示し、底部は平坦である。出土遺物は少なく、時期不明である。

⑲ 土坑19（挿図16）

土坑16・20を切ってE Q96・97で検出された。 $90 \times 70\text{cm}$ の不整円形を呈し、深さ 11cm を測る。断面皿状を呈する。坑内より土師器壺2片が出土した。

⑳ 土坑20（挿図16）

土坑19・21に切られた瓢箪形の土坑である。平面形から複数土坑の重複する可能性がある。規模 $85 \times 65\text{cm}$ 、深さ 12cm を測り、底部は平坦でややゆるやかに立ち上がる。土師器壺小破片1が出土した。

㉑ 土坑21（挿図16）

$80 \times 80\text{cm}$ の不整円形を呈し、土坑20・22を切る。検出面からの深さは 15cm で断面皿状を示す。

本址からは土師器壺小破片1が出土したのみである。

② 土坑22（挿図16）

土坑21に切られた不整楕円形を呈する土坑である。規模65×45cm、深さ18cmを測り、断面逆台形である。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

③ 土坑23（挿図16）

土坑29の北東に検出され、規模95×65cm、深さ34cmの不整楕円形を呈する。壁は急な立ち上がりを示し、断面逆台形である。本址から東側に向って傾斜が認められ、なだらかに下がっていく。出土遺物はいずれも小破片であるが、土師器壺がある。

④ 土坑24（挿図16）

規模105×65cm、深さ20cmの不整楕円形を呈する土坑で、土坑25に切られる。長軸方向N 35.5°Wを示す。ややゆるやかに凹み、西側は径25cm程一段低くなっている。坑内から土師器壺・壺・高壺等の遺物が出土した。

⑤ 土坑25（挿図16）

土坑24を切り、また土坑26と重複するが新旧関係は不明である。規模135×90cm、深さ24cmの不整楕円形を呈し、長軸方向はN 77°Wを示す。土師器壺口縁部等小破片が出土している。

⑥ 土坑26（挿図16）

土坑25と重複するが新旧関係は不明である。平面不整楕円形を呈し、規模(70)×50cm、深さ18cmを測る。壁はややゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は土師器壺他いずれも小破片である。

⑦ 土坑27（挿図16）

規模80×50cm、深さ22cmの不整楕円形を呈する土坑である。壁はゆるやかな立ち上がりを示し平底である。弥生土器壺・土師器壺等が出土している。

⑧ 土坑28（挿図16）

土坑25・32の間に検出され、規模70×65cm、深さ21cmを測る不整円形の土坑である。底部は南側が一段低い。出土遺物には土師器壺他小破片がある。

㊂ 土坑29（挿図16、第7図）

規模 $130 \times 75\text{cm}$ 、深さ $19 \sim 22\text{cm}$ の草鞋形の土坑である。底面は平坦で、壁が急に立ち上がる。平面形から複数土坑の切り合っている可能性を指摘できる。本址からは弥生土器壺・甕（第7図8・9）が出土しており、いわゆる弥生時代後期に比定される。

㊃ 土坑30（挿図16）

土坑28・35の間に検出され、規模 $70 \times 55\text{cm}$ 、深さ 18cm の不整椭円形を呈する。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、内部がさらに深くなっている。甕底部・台付甕・高环脚等の遺物が出土しており、古墳時代前期に比定できる。

㊄ 土坑31（挿図16）

土坑32に切られる規模 $65 \times 45\text{cm}$ 、深さ 15cm の不整椭円形を呈する土坑である。断面逆台形を示す。坑内より土師器甕等小破片4が出土した。

㊅ 土坑32（挿図16、第7図）

土坑33に切られ、溝址1を切る。規模 $145 \times (110)\text{cm}$ の不整椭円形を呈し、また底部は一段低く凹み、深さ 19cm を測る。弥生土器甕（第7図10）、土師器壺など小破片20片の出土をみる。

㊆ 土坑33（挿図16、第7図）

土坑32、溝址1を切る。規模 $90 \times 60\text{cm}$ 、深さ 21cm を測る不整三角形の土坑である。壁は急な立ち上がりを示し、平坦な底面をなす。弥生土器壺頸部片（第7図11）・底部の他、甕・甕小破片が出土し、弥生時代後期ないし古墳時代前期に位置づくと考えられるが、詳細時期は不明である。

㊇ 土坑34（挿図16）

土坑33・35の間に検出された、規模 $45 \times 45\text{cm}$ 、深さ 14cm の不整円形を呈する土坑である。断面逆台形を示す。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

㊈ 土坑35（挿図16、第7図）

規模 $115 \times 100\text{cm}$ の不整形を呈する土坑で、西側が一段低く、深さ 30cm を測る。壁はやや急な立ち上がりを示す。底面の状況から複数土坑の重複も考えられる。土師器甕（第7図12）高环（同15）等の古墳時代遺物の他、弥生土師甕片（同13）等が出土している。出土遺物から古墳時代前期に比定される。

⑧ 土坑36（挿図16、第7図）

平面不整橢円形を呈し、規模 $135 \times 95\text{cm}$ 、長軸方向は N 79.5°W を示す。西壁はゆるやかで、東側は低くなり立ち上がりも急である。最深部で検出面から 23cm を測る。弥生土器壺片（第7図16）の他は、土師器壺・甕等の小破片が多く出土しており、古墳時代前期の遺構である。

⑨ 土坑37（挿図16）

未調査区にかかり $\frac{1}{5}$ を調査したのみである。確認された短辺は 130cm を測る。推定不整橢円形を呈する土坑である。平坦な底面で西壁はゆるやかに立ち上がる。検出面からの深さは 16cm を測る。弥生土器1片の他、土師器壺・甕・壺等多くの小破片が出土しており、また黒曜石製の石鎌1点もある。出土遺物等から古墳時代前期に比定される。

⑩ 土坑38（挿図16）

規模 $90 \times 60\text{cm}$ 、深さ 12cm の不整橢円形を呈する土坑で、東壁は急に立ち上がり、また底面は西側に低く傾斜している。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑪ 土坑39（挿図16）

溝址1を切って確認された。規模 $(85) \times 65\text{cm}$ の不整橢円形を呈し、深さ 9cm を測る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は少なく、時期不明である。

⑫ 土坑40（挿図15）

溝址1と重複し、平面形は不明である。確認された一辺は 90cm で、深さ 16cm を測る。底面平底状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。本址からは土師器壺等小破片が出土している。

⑬ 土坑41（挿図16、第7図）

土坑42・44の間で確認された不整形を呈する土坑で、規模 $100 \times 60\text{cm}$ 、深さ 19cm を測る。底部は北側に低く傾斜し、また壁はやや急に立ち上がる。壺口縁部（第7図17）及び胴部、甕片が出土しており、弥生時代後期に比定される。

⑭ 土坑42（挿図16）

土坑43と重複して検出されたが、新旧関係は不明である。重複のため平面形は不明であるが、不整円形を呈すると思われる。検出面からの深さは 14cm を測る。底面は南側が低く、ゆるやかな立ち上がりを示す壁である。土師器壺・甕の小破片他、繩文土器片1が出土しており、古墳時代に属する遺構と考えられるが、詳細時期は不明である。

④ 土坑43（挿図16）

土坑42と重複するが、新旧関係は不明である。規模(100)×80cmの不整楕円形を呈すると思われる土坑で、深さ18cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。内部に35×20cmの小穴があり、検出面との比高差は45cmを測る。出土遺物は少なく、時期は不明である。

⑤ 土坑44（挿図16）

規模90×55cmの不整楕円形を呈し、深さ19cmを測る。断面舟底形をなす。本址からは土師器壺・壺小破片が出土した。

⑥ 土坑45（挿図16、第7図）

南側は調査区外にかかり、½を調査したにとどまる。不整楕円形を呈すると思われ、確認された一辺は、150cmを測る。中央が高く壁際は総体的に低い。西壁側が凹み、壁はゆるやかに立ち上がる。また、東側は一段深くなっている。土坑が切り合っている可能性がある。土師器壺口縁部を含め小破片3片が出土したにとどまる。

⑦ 土坑46（挿図15、第7図）

土坑57に切られ、柱穴を切っている。重複のため全体形は不明であるが、不整楕円形を呈すると思われ、確認された一辺は70cmを測る。検出面からの深さは10cmであるが、東側はやや高くなっている。土坑がさらに重複していた可能性がある。土師器壺（第7図20）、S字状口縁の壺（同19）及び壺小破片が出土しており、古墳時代前期に比定される。

⑧ 土坑47（挿図16）

規模80×60cm、深さ28cmの楕円形を呈する土坑で、底面は東側が低く、壁はゆるやかに立ち上がっている。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑨ 土坑48（挿図16）

溝1を切り、暗渠排水に切られている。規模55×50cm、深さ24cmの不整円形の土坑で、底部は平坦でゆるやかに立ち上がっている。坑内からの出土遺物は土師器壺1片の他、弥生時代後期の壺・壺片が多く出土しており、中島式期に比定される。

⑩ 土坑49（挿図16）

土坑27の北東に柱穴を切って確認された。規模75×50cm、深さ25cmを測る瓢箪形の土坑で、その形態より複数造構の重複も考えられる。平坦な底面をなし、壁が急に立ち上がる。壺破片2が出土しており、弥生時代後期ないし古墳時代前期の造構と考えられる。

◎ 土坑50（挿図16）

暗渠排水の北側に検出され、柱穴を切る。平面プランは不整椭円形で、規模 $80 \times 45\text{cm}$ 、深さ 23cm を測る。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、底面は北側が低くなっている。壺底部・土師器墻片が出土した。

◎ 土坑51（挿図16）

土坑16の北側で柱穴を切って検出された。規模 $65 \times 35\text{cm}$ 、深さ 18cm の椭円形を呈する土坑でゆるやかな立ち上がりの舟底状断面をもつ。鉢と思われる遺物等若干の小破片の出土をみる。

◎ 土坑52（挿図15、第7図）

土坑55に切られる。未調査区にかかり全体を完掘していない。張り出し部を持つ等の点から複数土坑の重複する可能性が指摘できる。確認された短辺は 180cm 、深さ 14cm を測る。北東部に一段低い部分がある。本址からは土師器墻・小型鉢（第7図22）及び緑色岩剥片が出土している。

◎ 土坑53（挿図15、第8図）

溝址1と重複し、全体形は不明であるが、確認された一辺は 60cm 、深さ 15cm を測る。急な立ち上がりを示す壁であり、底面は東側が低くなっている。形状等から土坑の重複する可能性もある。

小型壺・墻片の他、溝址1出土の破片と接合した甕口縁部（第8図1）がある。

◎ 土坑54（挿図15）

溝址1と重複し、このため全体形・規模は不明である。検出面からの深さ 25cm を測り、東側が凹み、また壁はやや急に立ち上がる。出土遺物はいずれも小破片であり、弥生時代の壺・朱塗の波状文を施した甕がある。

◎ 土坑55（挿図15）

土坑52を切る。調査区外にかかり全体を調査していない。 $(180) \times (160)\text{cm}$ の不整椭円形を呈するものと思われ、深さ 29cm を測る。断面逆台形である。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

◎ 土坑56（挿図15、第8図）

溝址1と重複し、平面プラン等不明である。深さ 34cm で南側は一段低くなっており、また東壁はゆるやかな立ち上がりを示す。第8図2の壺底部の他出土遺物は少なく、時期不明である。

◎ 土坑57（挿図15）

土坑46を切る。規模 160×140 cm、深さ 7 cm を測り、平面不整椭円形・断面皿状を呈する土坑である。坑内に40×35cmの柱穴がある。若干の遺物が出土したのみで詳細時期は不明である。

◎ 土坑58（挿図15）

規模 85×60cm、深さ 11cm の不整椭円形を呈する土坑である。壁はややゆるやかに立ち上がり、底面中央が若干凹む。出土遺物は少なく、時期不明である。
(馬場保之)

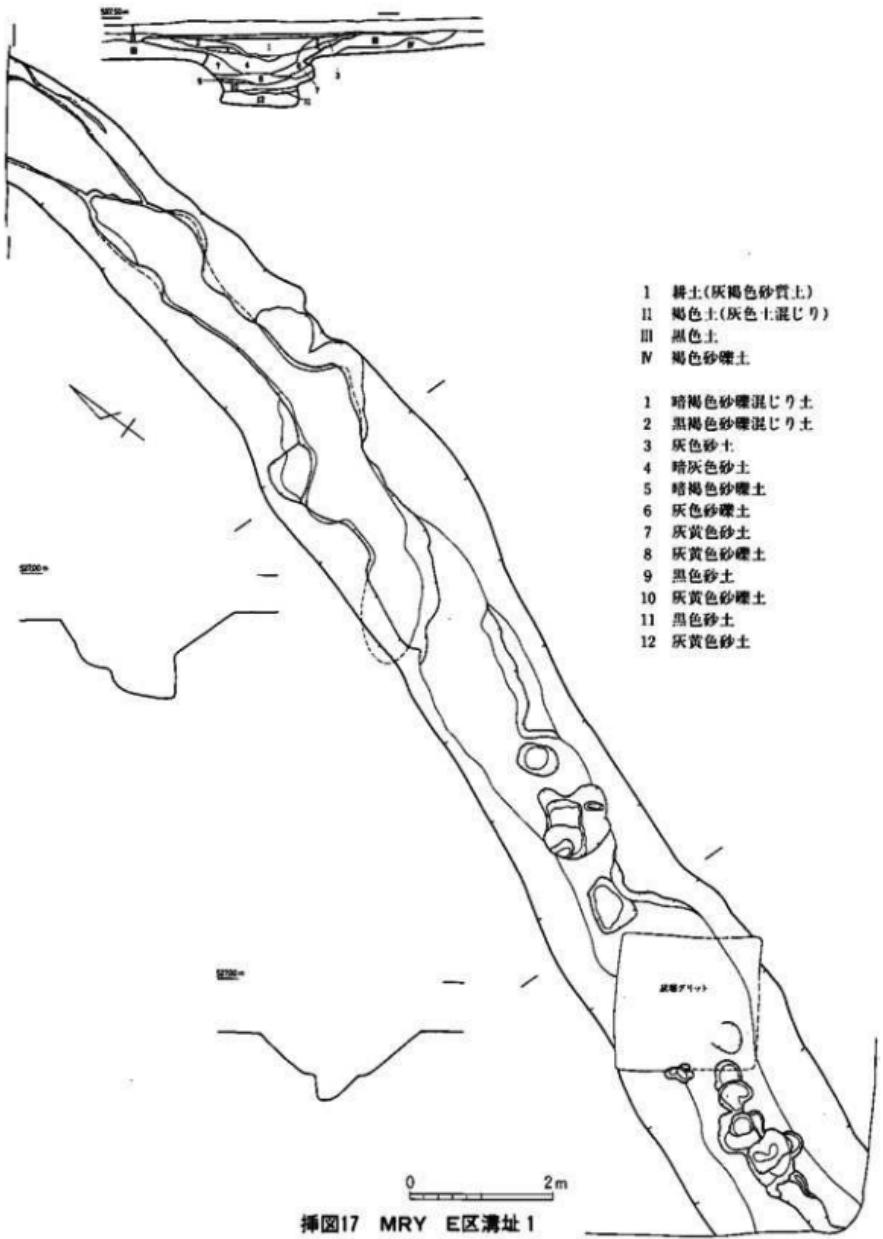
2) 溝 墓

① 溝 墓 1 (挿図17、第8図)

調査区をやや東へ湾曲しながら、ほぼ南北に横切って検出した。長さは調査部分で 19.4m、幅 2.4～1.6 m で、深さは検出面から 110～65cm を測る。壁面は比較的ゆるやかに立ちあがるが、ところどころに棱があり、一部えぐり込むところもある。北より 2 m 程南下したところで、一段深く落ち込み、深さがこの部分で最深となり、その状態で 7 m 程南へ下る。そして再び一段高くなる。この一段低い部分では、湧水がみられ調査中にさえも 20cm 程度の水をたたえていた。南側半分には水の流れによる凹凸が認められた。人為的な水路であるか、自然流路であるかの断定は困難であるが、集落地及び耕地（水田）に隣接すると判断される位置にあり、総合的に判断すれば、人為的な造営である可能性が強い。覆土中、遺物が出土したのは、ほとんど上部に限られていたが、数はかなり多い。しかし破片であり、その器形を知るものはない。

弥生時代の遺物としては、横線文と波状文を組み合わせた壺（第8図9）、三段の斜走短線を持つ壺（同4）、波状文のみのもの（同6）、横線文と山形文を組み合わせたもの（同7）きざみのある口縁（同5）、同じく弥生時代の壺の底英（同8）、土師器小型の壺（同3）、土師器で円形のすかしをもつ高环の脚部（同10・11）などがある。

本址の時代は掘り込み面が弥生時代から古墳時代遺物包含層下部と判断され、出土遺物と合わせ弥生時代末から古墳時代前期と考えられる。
(吉川 豊)



插図17 MRY E区溝址 1

3) 柱穴

E区で柱穴として把握した穴は溝址1より東側に集中する。34本を検出したが北側の穴のうち大形のものは掘り方壁面がゆるやかで土坑の可能性が高い。遺物は何も出土しなかった。掘り方直徑90cmの土坑状の穴を除くと直徑が50cm程のものと20cm程の穴に別けられる。前者は深さ11~33cm、後者が13~27cmを測る。両者と規則性を持った並びは確認できなかった。しかし後者の中で6本がE Q98・99グリットに集中する。覆土も皆同じ黒色で、深さも15cm前後と統一性があるが性格は不明である。

時期は磨滅した土師器小破片が出土した穴もあるが、穴に直接伴なう遺物とは考えられず時期を決定できるものは無い。

(佐合英治)

4) 暗渠排水

C・D区と同様、本区でも明治・大正期に構築された暗渠排水が検出された。

E A95試掘坑では西辺に半分かかった状態で検出された。深さ50~60cmの溝掘り方両側に小児頭大の扁平錐を立て、その上に天井部を架ける。上部に拳大円錐を敷きつめ、さらに黒褐色土を埋めている。

E U95及び本調査区北隅に検出された二本の暗渠排水は、その位置関係から繋がるもので、構造的にはE A95検出のものとほぼ同じである。ただ、埋め戻した土が上層に疊混り砂層、下層に砂層であった点異なる。溝掘り方は深さ約90cm、幅約40cmである。

(馬場保之)

5) その他

① 遺構外出土遺物（第9~11）

E区全体は緩やかではあるが総体に南方のD区に向かって傾斜しており、耕土下に溝址及び土坑を検出した褐色砂土を覆って黒色砂土の層があり、傾斜地に堆積した包含層である。遺物の出土量は極めて多く、調査範囲全体に敷きつめたようである。

E区の出土遺物の大半が同層からの出土品であり、その内容としては弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのものである。

主なものとしては、S字状口縁台付甕（第10図8・9）・壺（第9図11~20）・甕（同7~10）、

第10図1～7)・小型器台(第11図5・7)などがある。

遺物の出土状態及び下部に土坑の集中する状況などから、隣接地に存在の予想される集落址に関連した廃棄物の投棄された場所の指摘も可能といえる。
(小林正春)

② その他

E A95・E U95は先述のとおり、暗渠排水のみ検出された。

F A99は隣接するE区とは異なった土層堆積状況を示し、表土下40cmで南東に向って急激に落ち込む。埋土が砂層ないし疊混りの砂層であることから旧河道である可能性もある。表土下1mよりは無遺物層で、小枝片・山桃の種子を多く包含し、水成堆積の様相を示す。遺物は耕土から近世の角型鉢等陶器片少量が、また以下から土師器小片、須恵器坏が出土した。

F F99では遺構は検出できず、打製石斧小破片1点の他、土師器壺片・須恵器坏等小破片が出土したにとどまる。
(馬場保之)

IV ま と め

丸山・羽場地区における発掘調査は中央自動車道建設時以来本格的な調査としては初めてであり、道路敷部分のみという限られた範囲の中で一定の成果があった。今次の発掘調査の結果、C・E区を中心に弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構・遺物等が検出された。

C区では弥生・古墳時代の8軒の竪穴住居址・土坑及び中世の生活面が確認された。竪穴住居址は1・2・6号住居址以外は非常に出土遺物が少なく、詳細時期を把握することは困難である。

古墳時代前期から後期への移行期の1号住居址からは、良好な土器類のセットが出土した。これまで該期の調査例は少なく、土器群の内容理解も十分と言えないのが現状であるが、本址出土の一括した遺物は該期の土器研究を進める上で貴重な資料といえる。

火事に遭った2号住居址は南隅に遺物がまとまって出土しており、遺存度が高く、壊類が重なった状態で出土する等生活の痕跡を色濃くとどめている。検出状況から極めて一括性の高い使用時のセットであり、貴重な資料である。

5号住居址は懸隔した調査の中で規模・床面の状態等の整合しない点がある。覆土中より中世の遺物が出土し、また東西方向の規模が著しく短かい点、猿小場遺跡31号住居址（1980）、小堀外・辻垣外遺跡13・17号住居址（1973）、上の金谷遺跡4号住居址（1973）等と類似することから中世の竪穴住居址である可能性がある。とすれば、本址の北東隅を古墳時代の8号住居址が切っていることから複数の竪穴住居址の重複が考えられ、本址の検出状況の不整合性も納得される。

6号住居址と8号住居址は平面形・規模・主軸（長軸）方向・貼り床等の点で極めて類似する。8号住居址でカマドが確認されていないこと、出土遺物が少ない等の相違もあるが、6号住居址が初源的なカマドを備えていることから近接した時期に営まれたものと考えられる。

7号住居址は主柱を結んだ外側が一段高く貼り床されている。こうした形態の竪穴住居址は恒川遺跡群阿弥陀坦外地籍7号住居址（1986）等に類例がある。AMD7号住居址が古墳時代後期に比定されるのに対し、本址は弥生時代から古墳時代の移行期で所属時期は相違している。両者とも当該時期の集落の中で普遍的な存在ではなく、規模もやや小型であることから特殊な性格を有する遺構である可能性もある。

調査区の東側に寄った部分には焼土散布やたたき状の部分が存在することから、中世の生活面が調査区の東側に広がっていると考えられる。

C区は地形的には源長川にはほぼ平行した微高地上に位置し、調査区西側から弥生時代後期の壺一個体が採取された等の点から、微高地上に弥生時代から古墳時代ならびに中世の集落が展開していたと考えられる。

D区は微高地のC区とE区の間にあって凹地状の低湿な地域に相当し、弥生時代後期・中世等の遺物が出土した。しかし、遺物量は少なく、地下水位も高いことから、水稻耕作の行なわれた

可能性が高い。

E区は弥生時代後期から古墳時代にかけての土坑58基と柱穴、溝跡が検出された。検出面から土坑底部までのレベル差がそれほど大きないことから上部は耕作によってかなり破壊されていると思われる。土坑の形態や長軸方向・出土遺物等に共通性は抽出できず、かつ営まれた期間が比較的長期に及ぶことから廃棄場的な性格も考えられる。

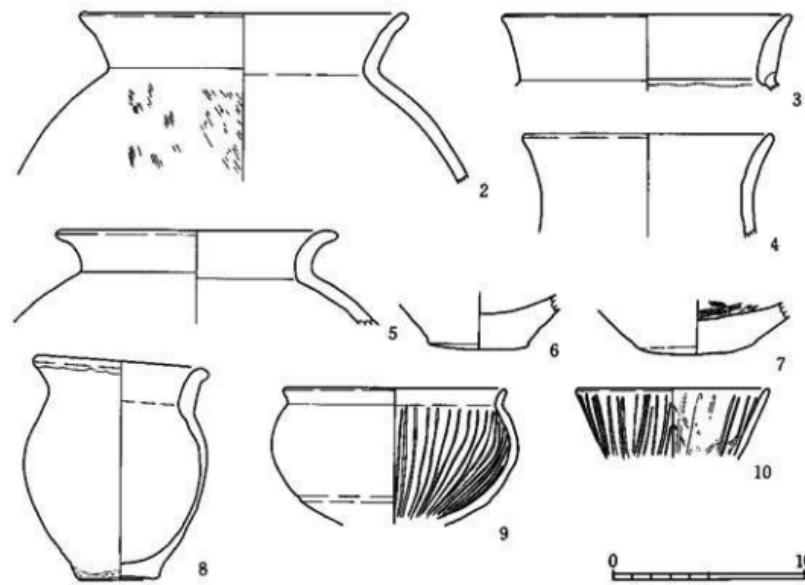
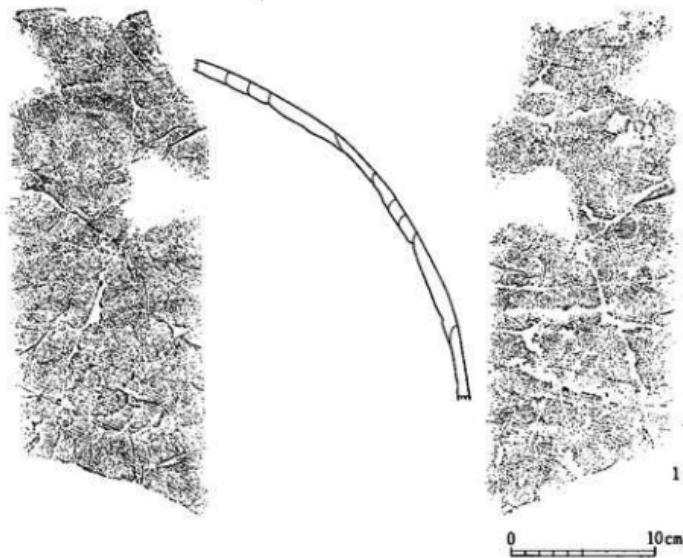
C区とE区は平行する微高地にあたり、ほぼ同時期の遺構が検出されている。両者の対照的な遺構の相違は意識的な土地利用状況を示しており、D区を含めて遺跡全体に調査の手が及べば該期の集落経営の実態がある程度解明されるものと考えられる。そして同時期の遺構が調査された恒川遺跡群や松尾清水（1976）等と比較検討していくことによって古代下伊那の地域史解明が進むといえる。

（馬場保之）

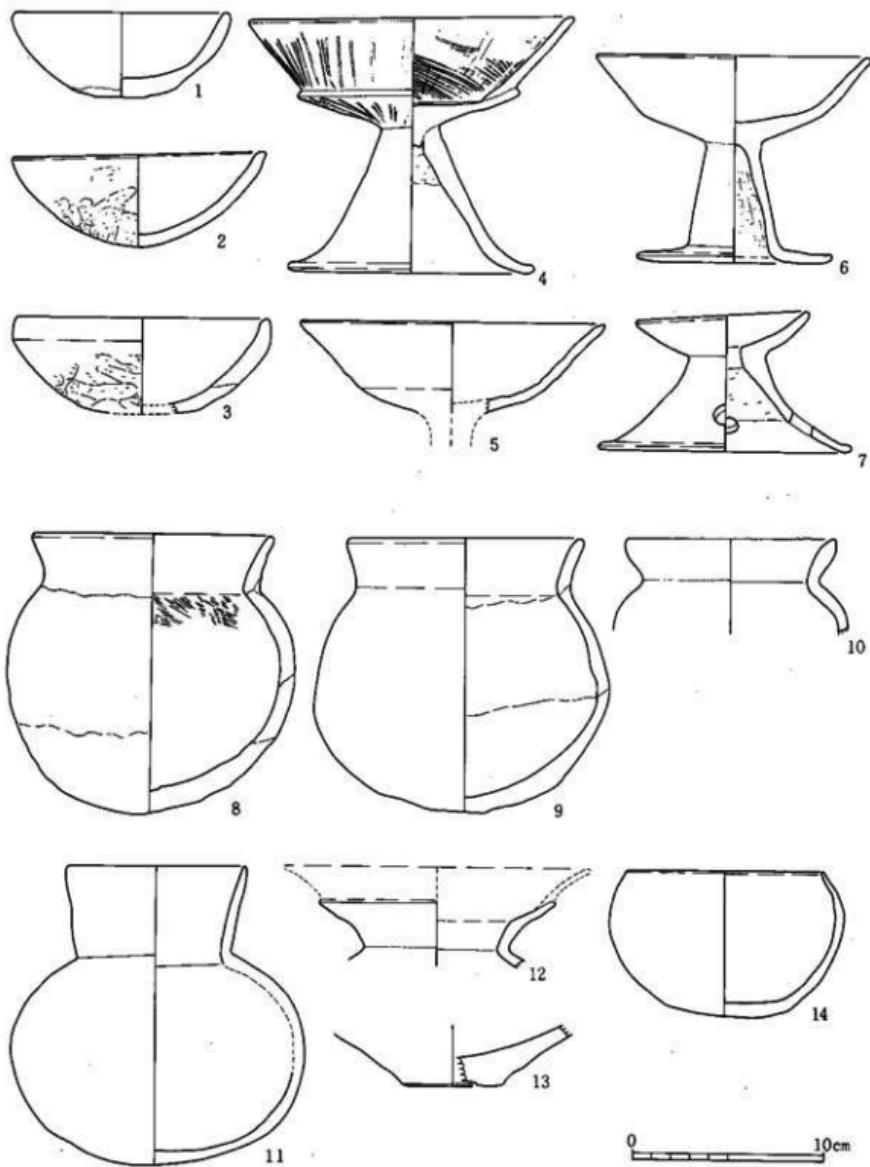
引用参考文献

- 1973 日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 「Ⅲ. 調査遺跡 13. 小恒外・辻垣外遺跡」
長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯田市地内その2 PP. 65~73
- 1973 同上 「Ⅲ. 調査遺跡 15. 上の金谷遺跡」 同上 PP. 76~81
- 1976 飯田市教育委員会 「清水遺跡」
- 1980 長野県飯田長姫高等学校・飯田市教育委員会 「猿小場遺跡」
- 1986 飯田市教育委員会 「恒川遺跡群」

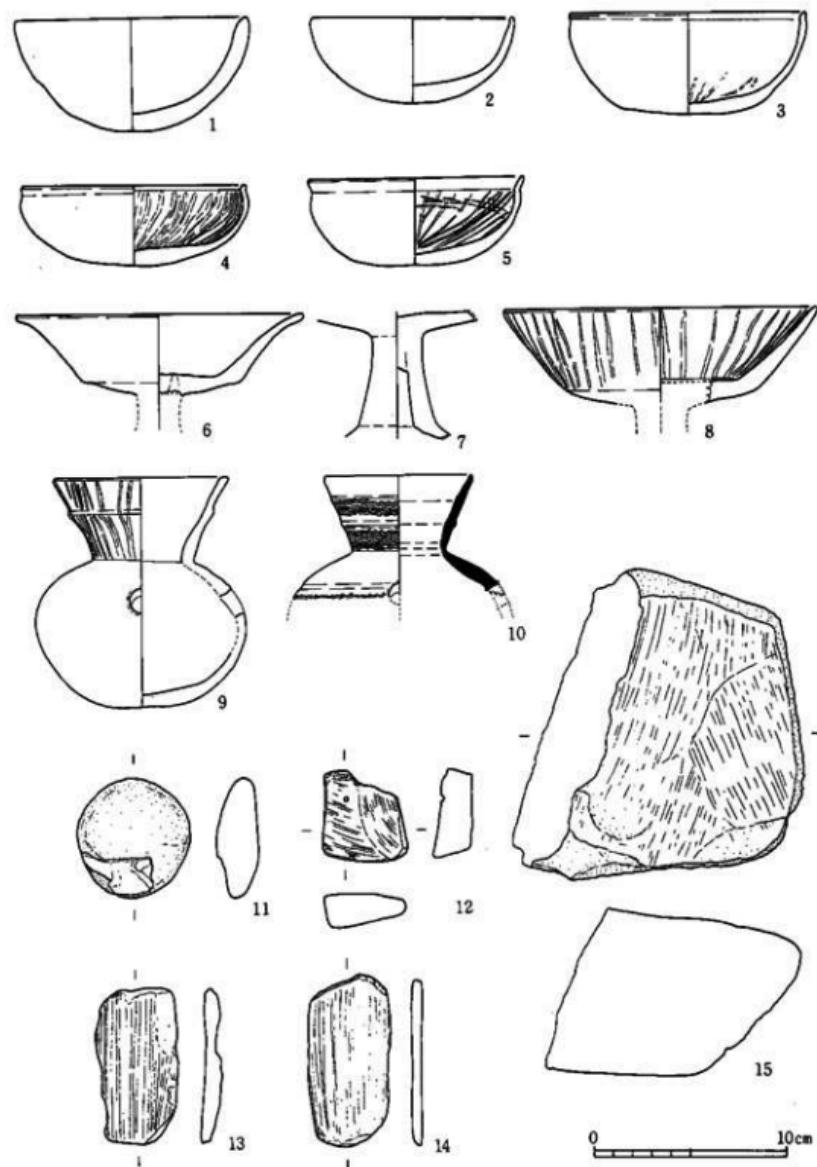
図 版



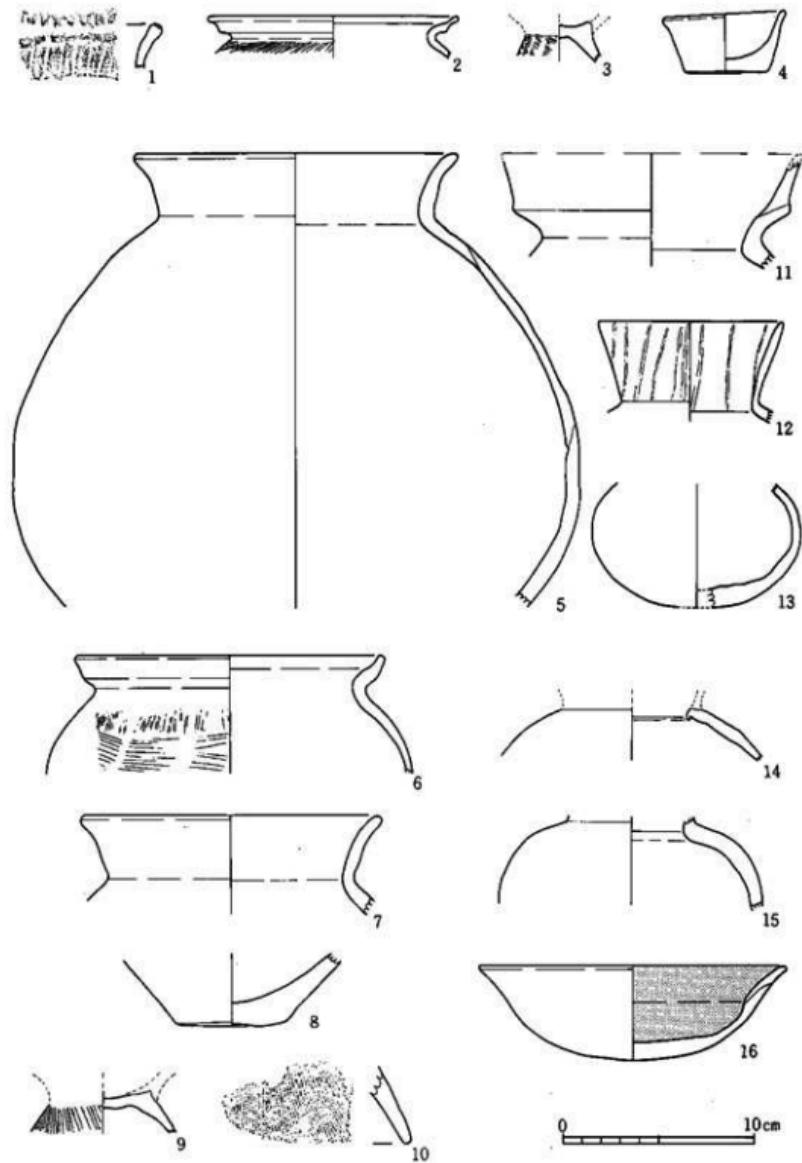
第1図 MRY 1号住居址出土遺物



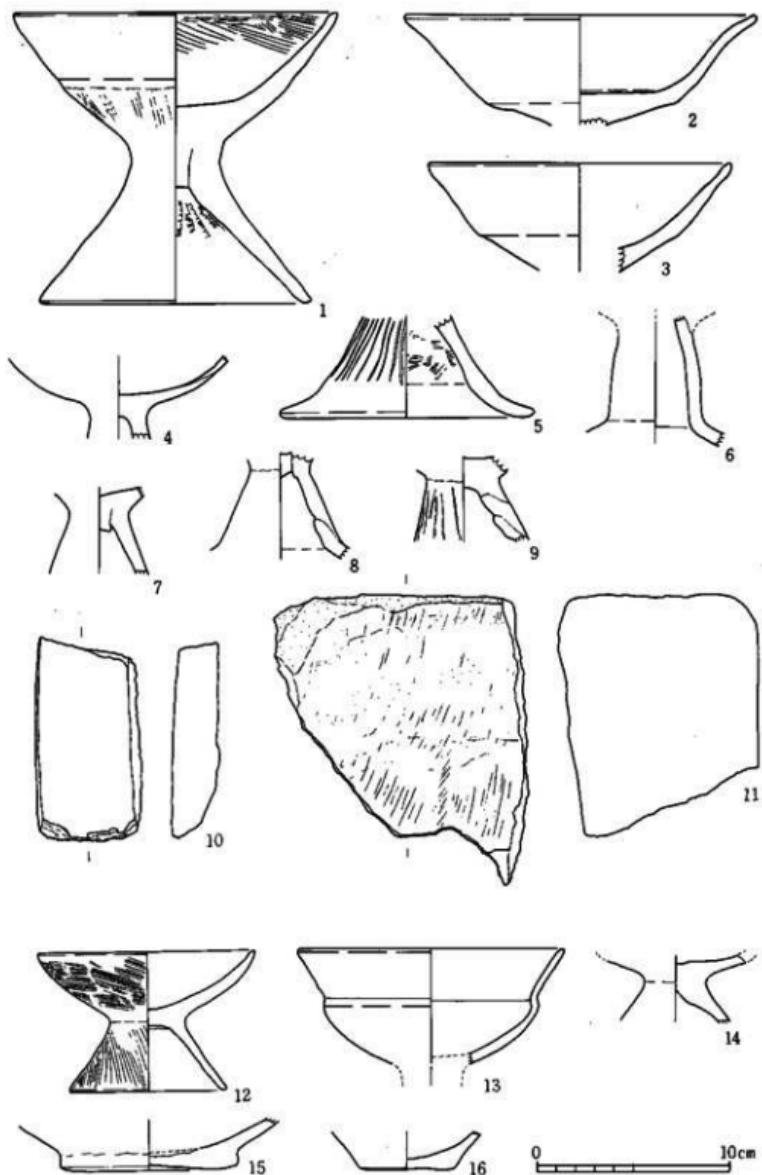
第2図 MRY 1・2号住居址出土遺物
(1-7 1住, 8-14 2住)



第3図 MRY 2号住居址出土遺物

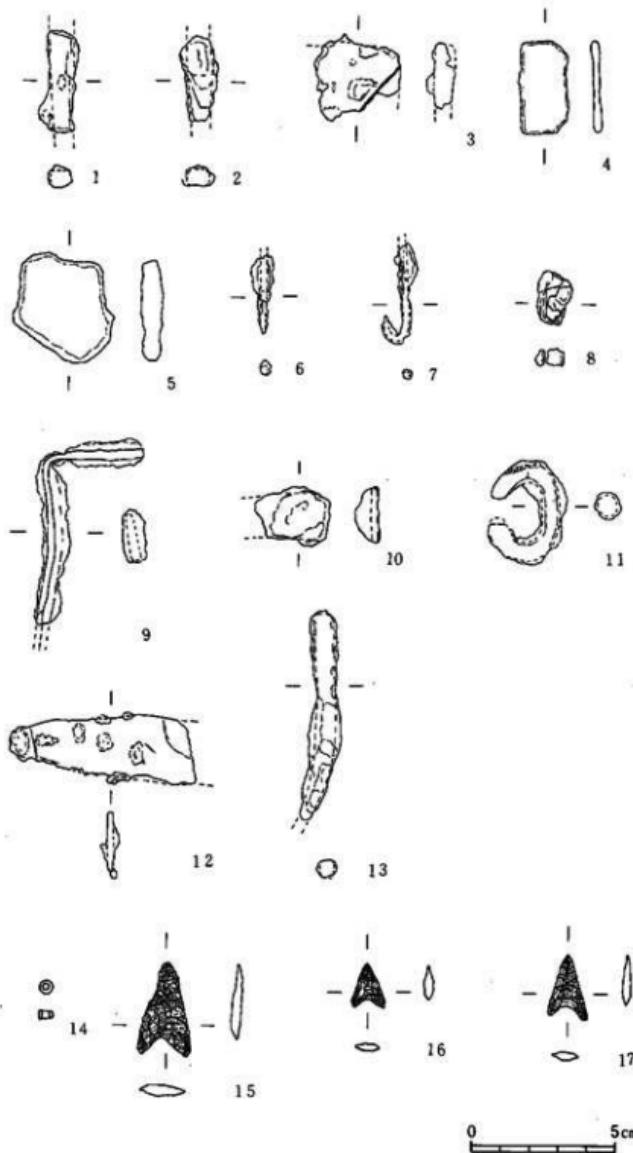


第4図 MRY 4・6号住居址出土遺物
(1-4 4住, 5-16 6住)

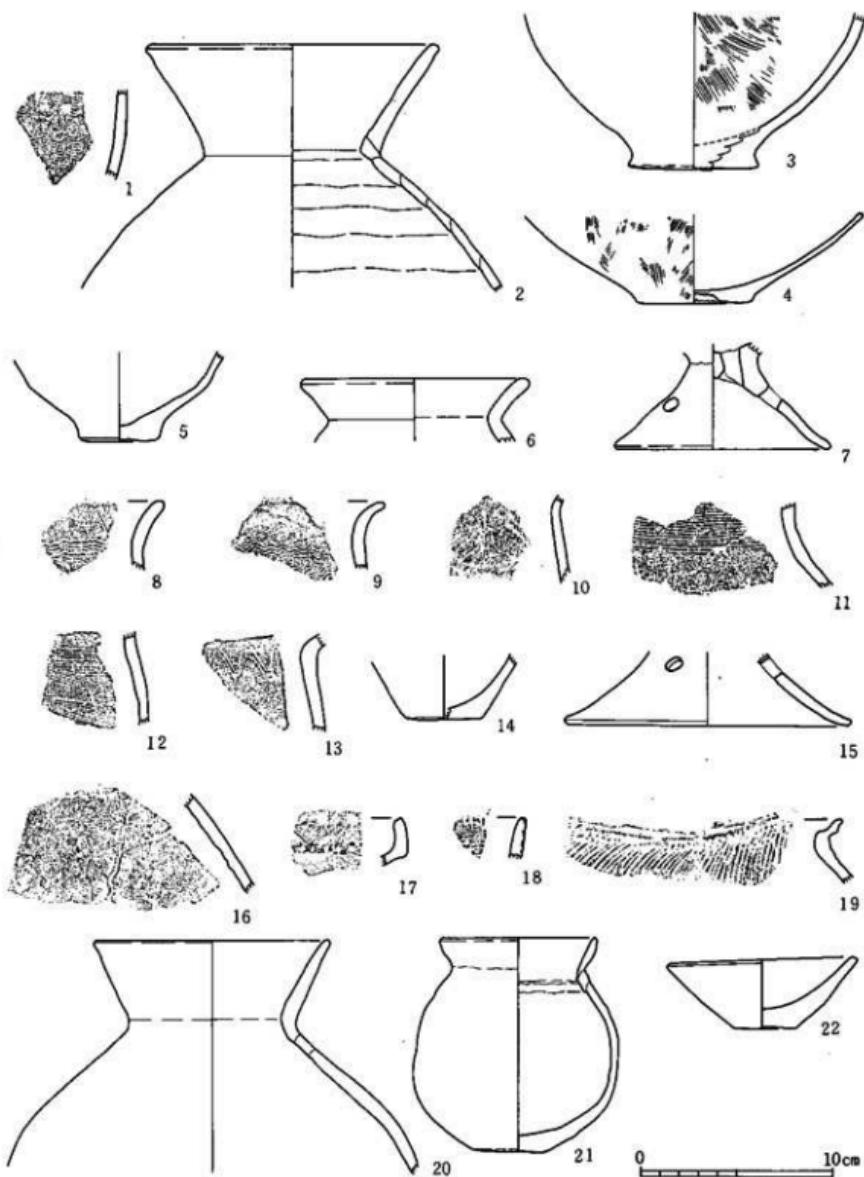


第5図 MRY 6・7号住居址出土遺物

(1-11 6住, 12-16 7住)

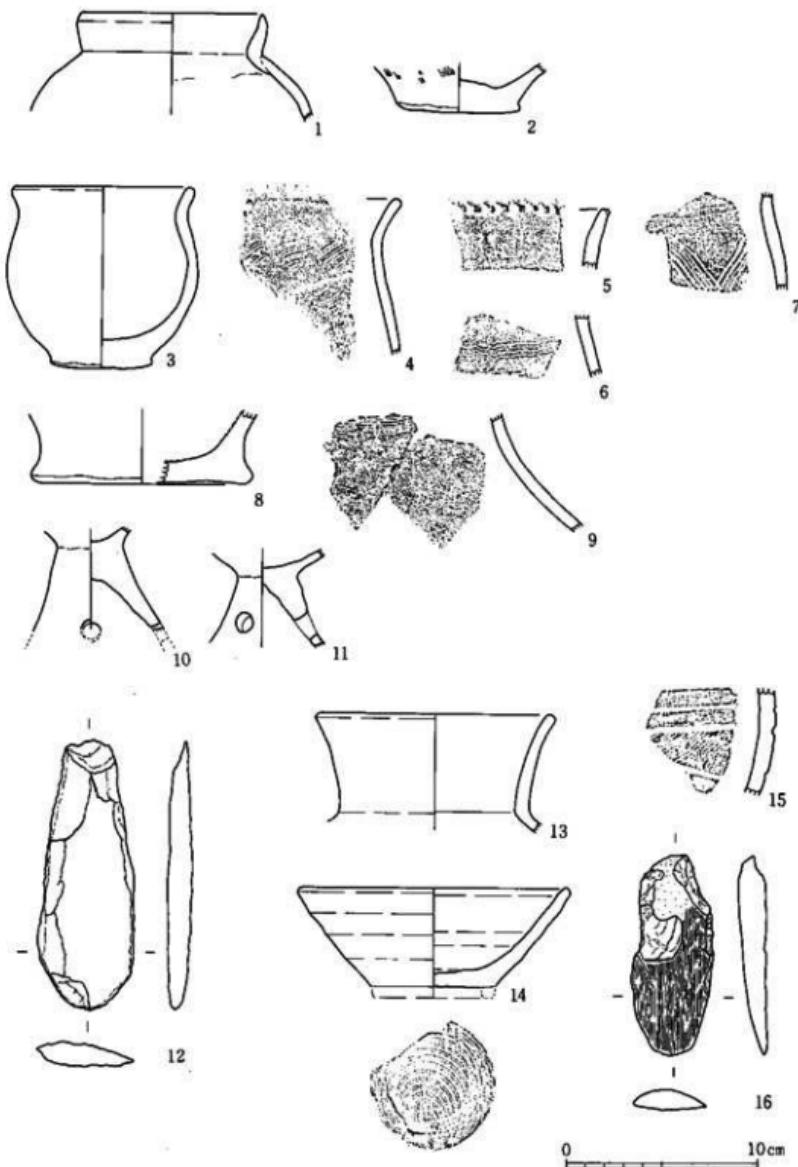


第6図 MRY 出土鉄製品・石製品・石器
 (1-8 1住, 9 2住, 10-11 5住, 12 6住, 13 D区遺構外)
 (14 2住, 15 6住, 16 土37, 17 E区遺構外)



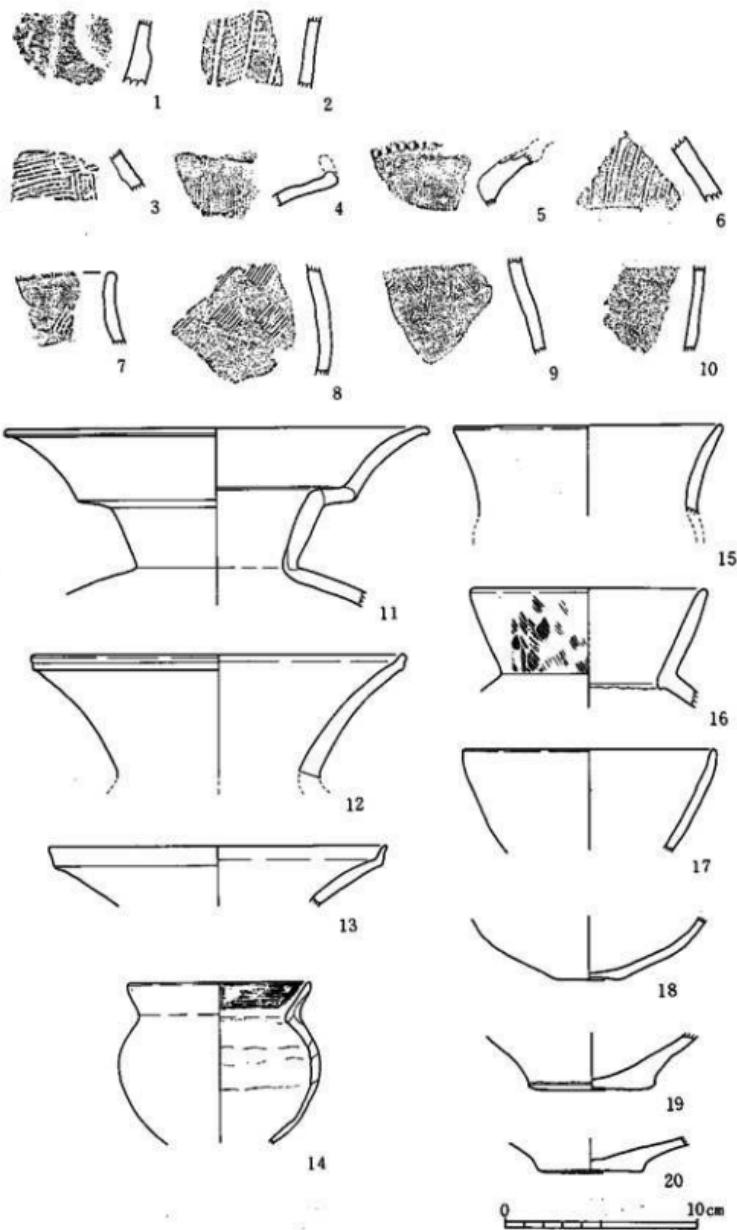
第7図 MRY 土坑, 1・2・3・11・12・15・29・32・33・35・36・41・45・46・52出土遺物

(1 土1, 2・3 土2, 4 土3, 5 土11, 6 土12, 7 土15, 8・9 土29, 10 土32
 (11 土33, 12・15 土35, 16 土36, 17 土41, 18 土45, 19・20 土46, 21・22 土52)

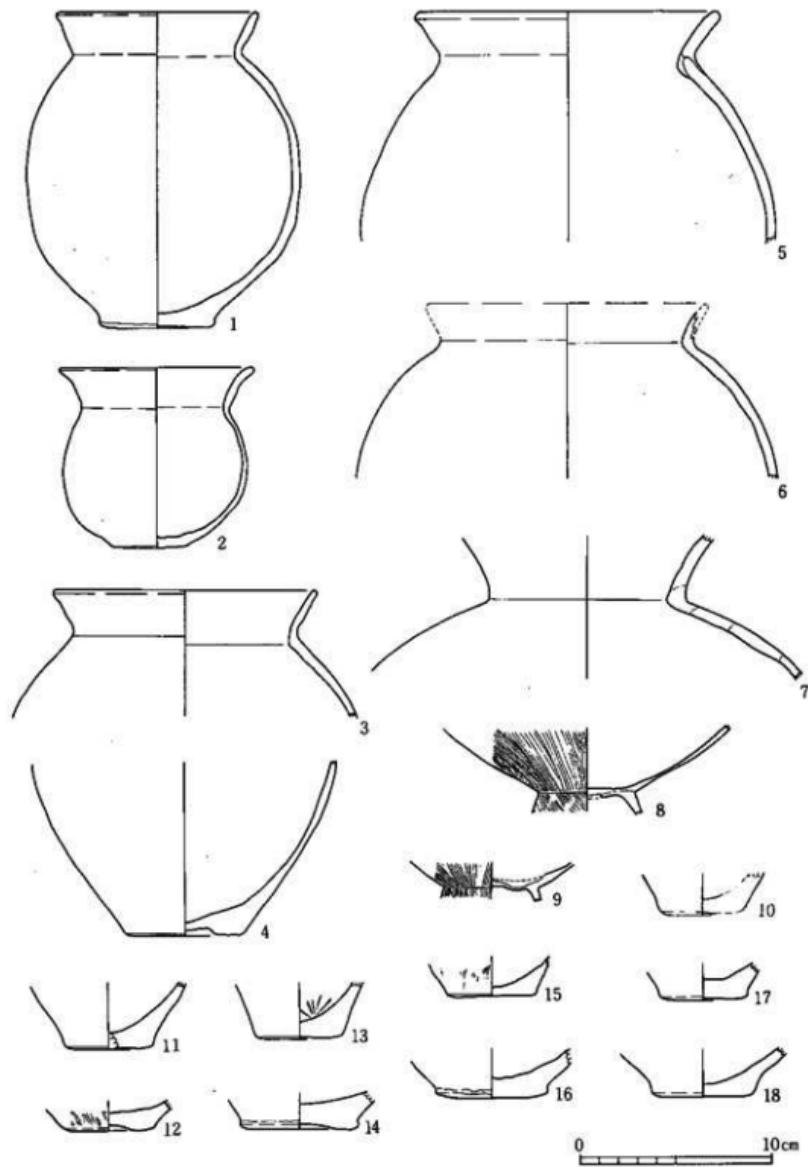


第8図 MRY 土坑53・56, 溝址1, B・C区造構外出土遺物

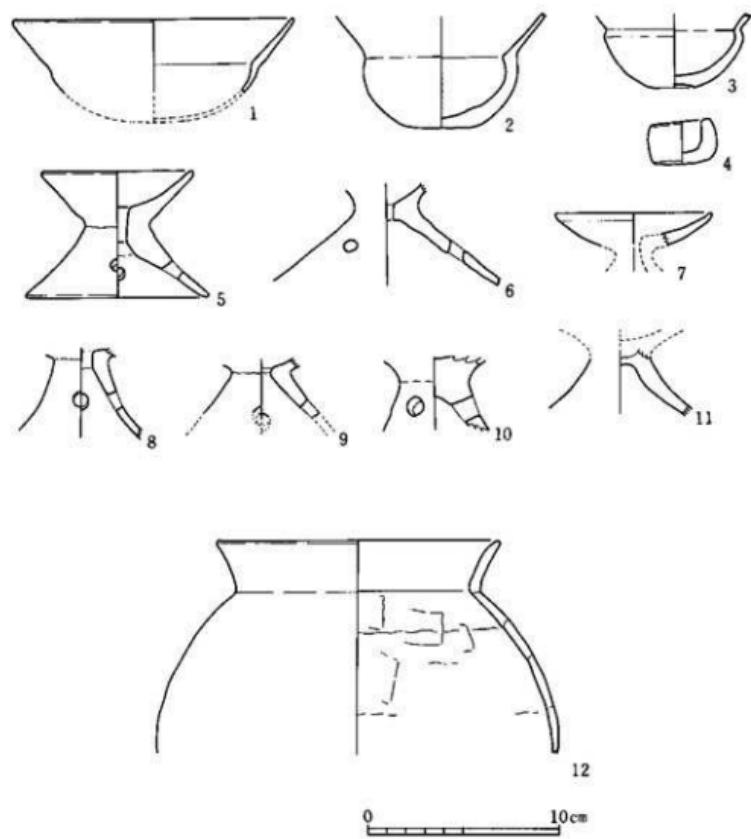
(1 土53, 2 土56, 3-11 溝址1,
(12 B区造構外, 13-16 C区造構外)



第9図 MRY E区造構外出土遺物



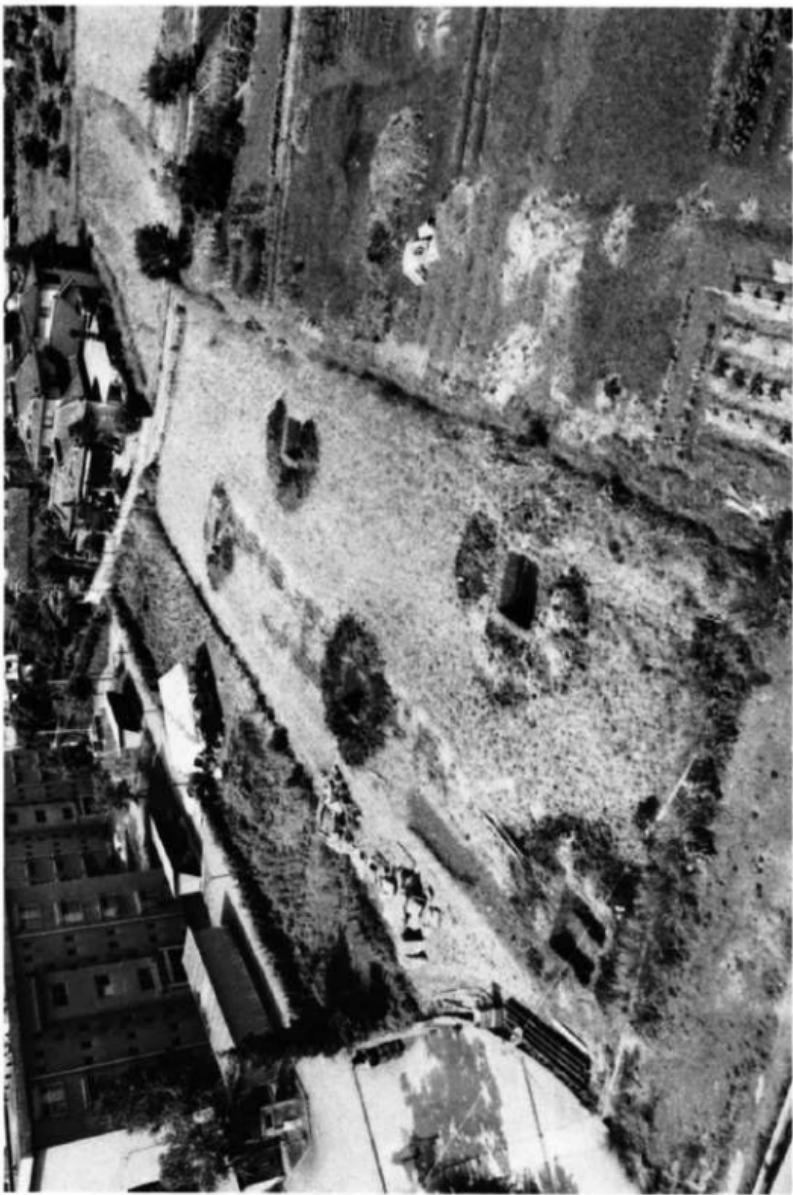
第10図 MRY E区遺構外出土遺物



第11図 MRY 4号住居址, E区造構外出土遺物
(12 4住, 1-11 E区造構外)

写 真 図 版

図版 1

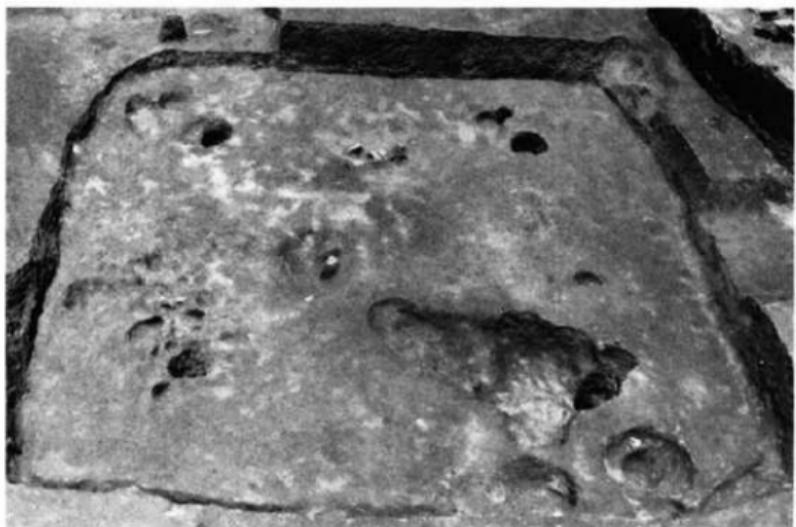


丸山遺跡全景

図版 2



図版 3



1号住居址



同 遺物出土状況



2号住居址

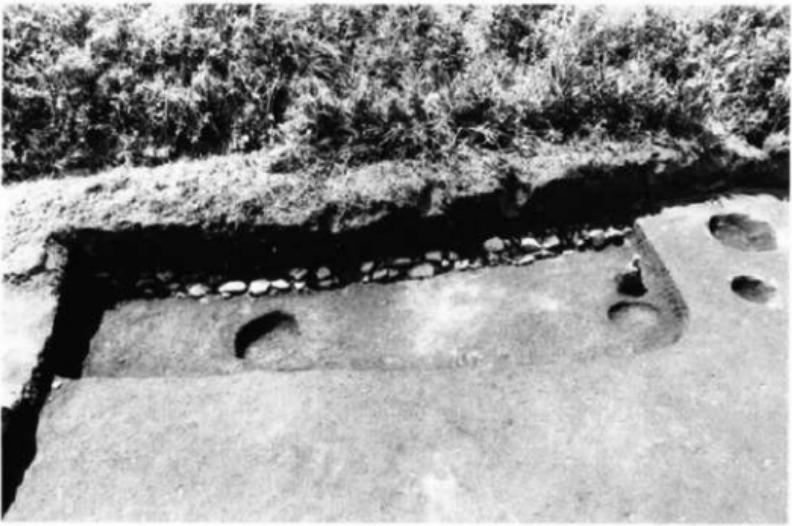


同 遺物出土状況

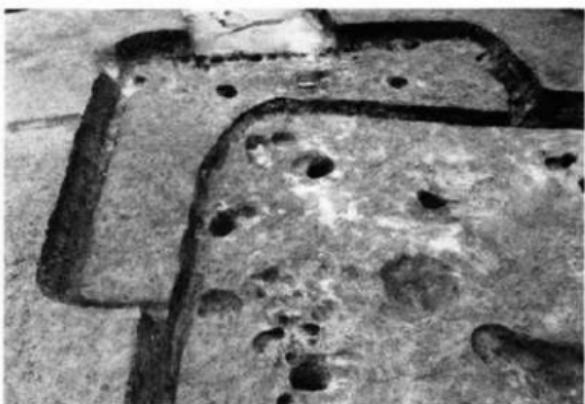
図版 5



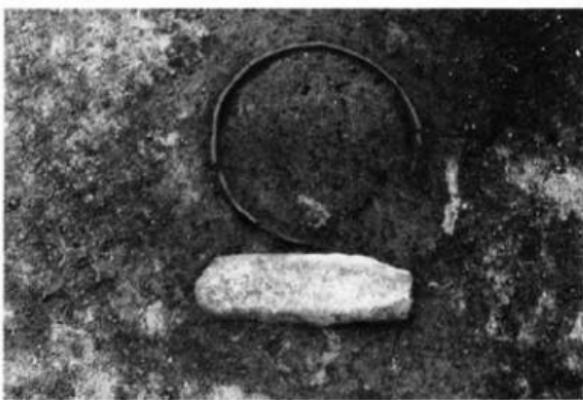
2号住居址 遺物出土状況



3号住居址



4号住居址



同炉址

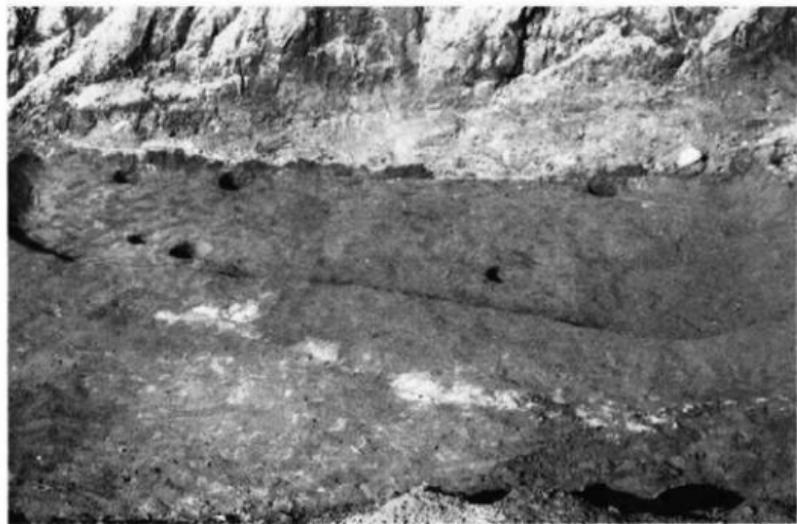


同断面

図版 7



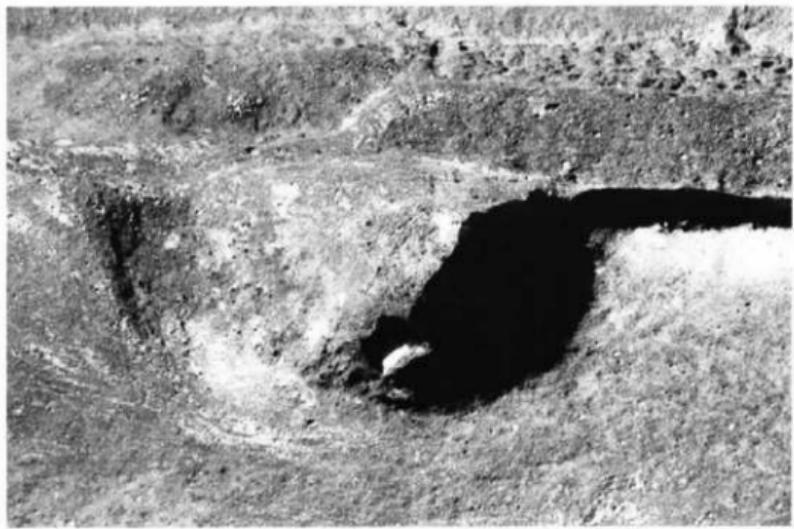
5号住居址



同



6号住居址



同 入口施設

図版 9



6号住居址 カマド



同 断面

図版 10



7号住居址

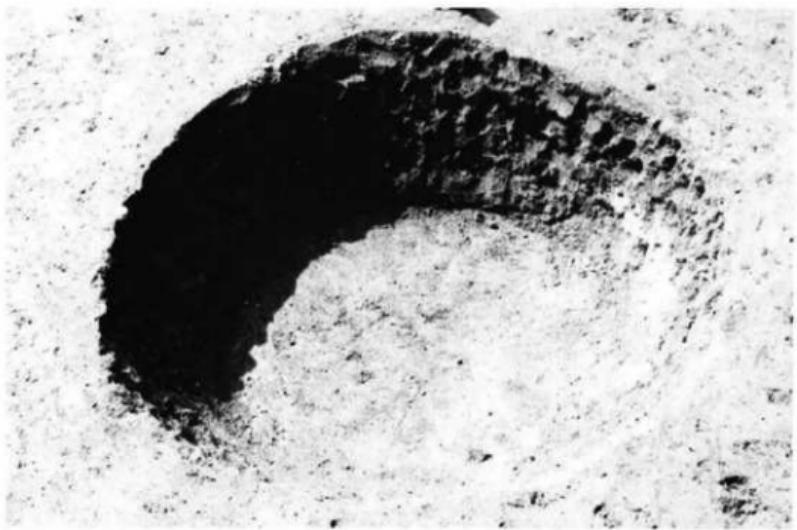


同

図版 11

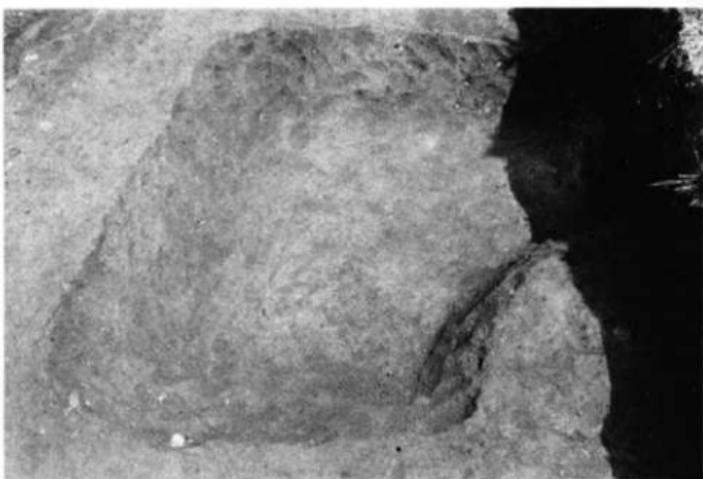


8号住居址

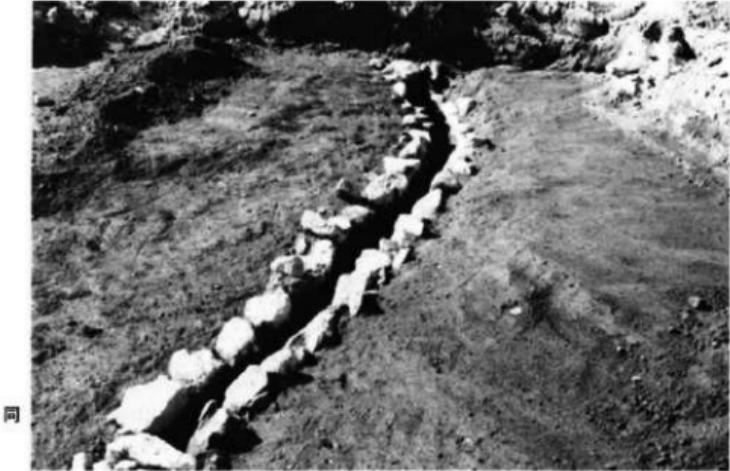


土坑59

図版 12



図版 13



同

図版 14



D区
全景

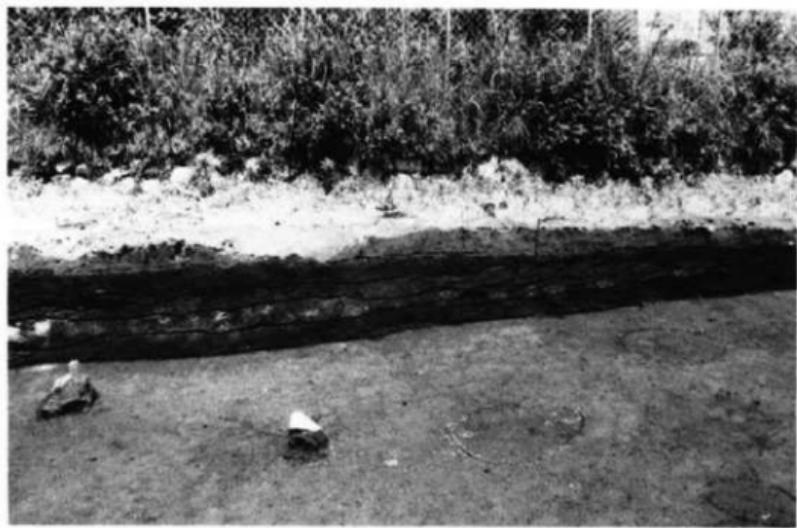


D K
99 暗渠排水

図版 15

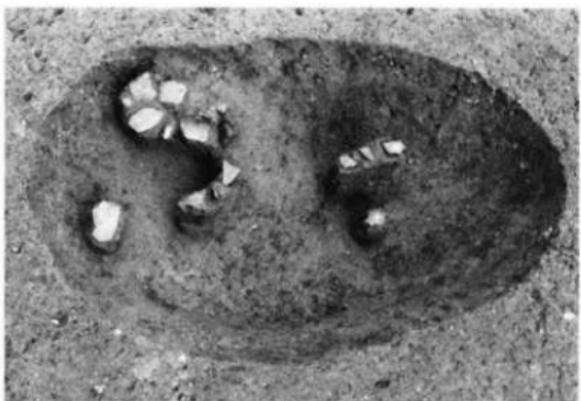


E区全景

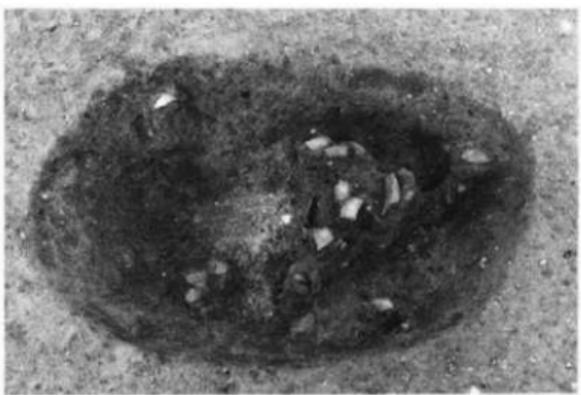


E区土層堆積状況

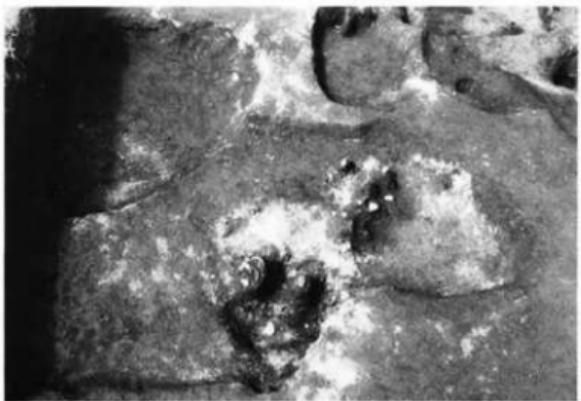
図版 16



土坑
1



土坑
2

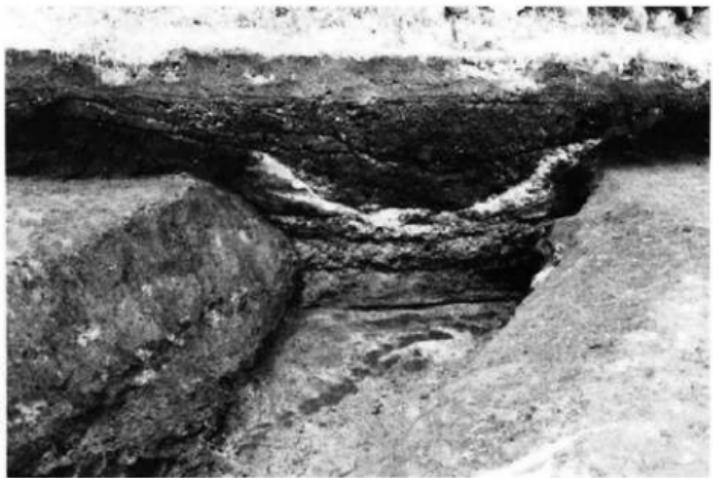


土坑
52-
56

図版 17



同
断面





E A 95暗渠排水



E 区造构外出土遗物

図版 19

E区遺構外出土遺物

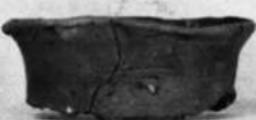


同



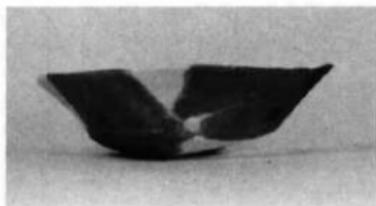
同



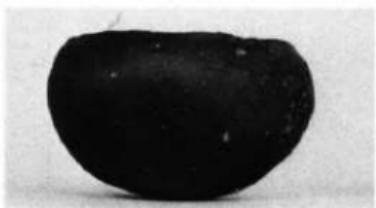


1号住居址出土遗物

図版 21

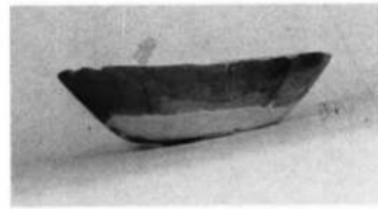
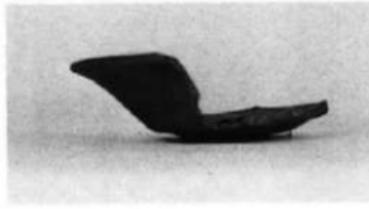
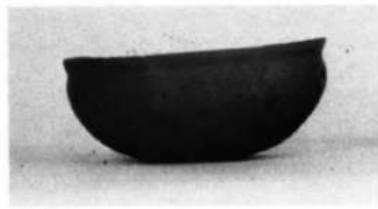
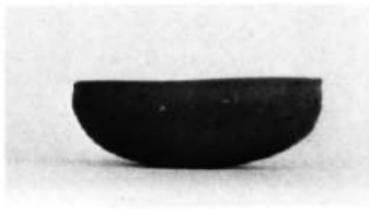
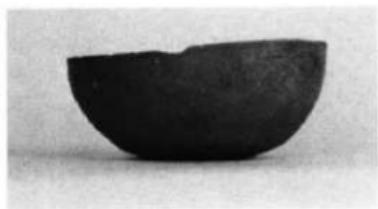
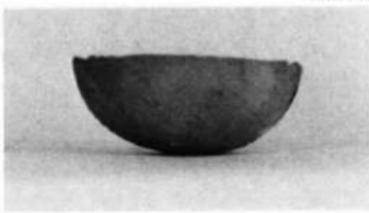


1号住居址出土遺物



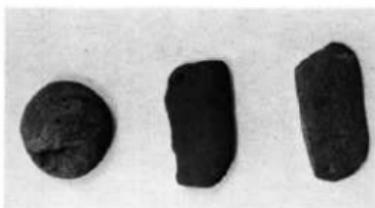
2号住居址出土遺物

図版 22

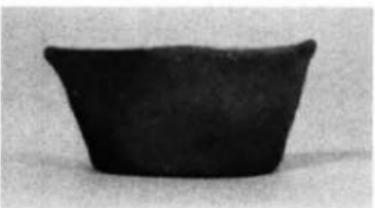
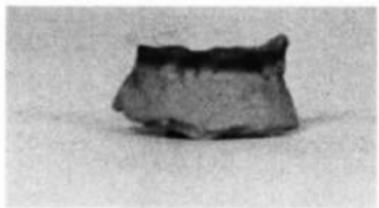
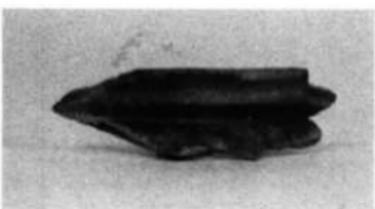


2号住居址出土遺物

图版 23

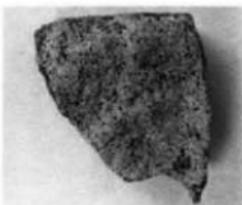
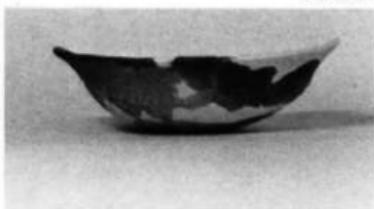


2号住居址出土遗物

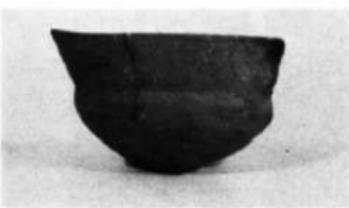


4号住居址出土遗物

图版 24

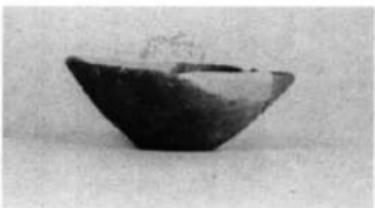
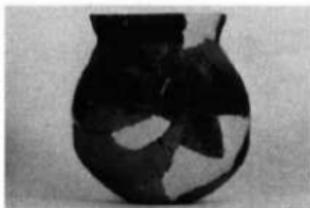
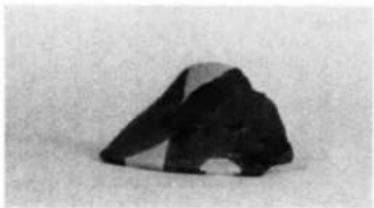
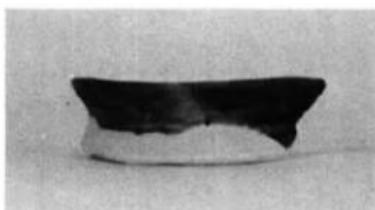
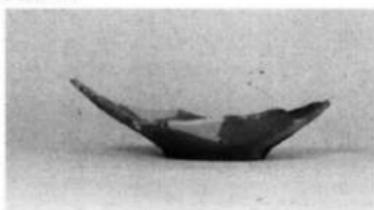


6号住居址出土遗物

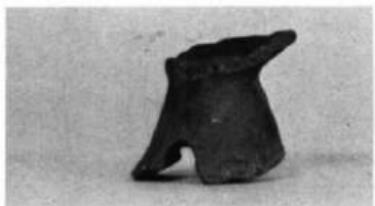
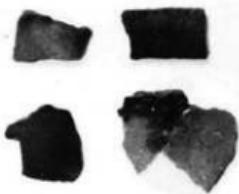


7号住居址出土遗物

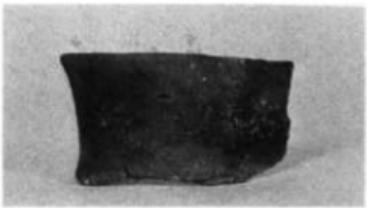
圖版 25



土坑出土遺物

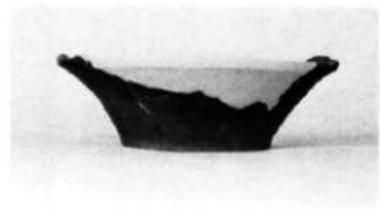
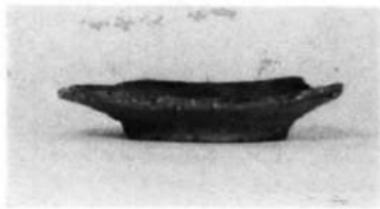
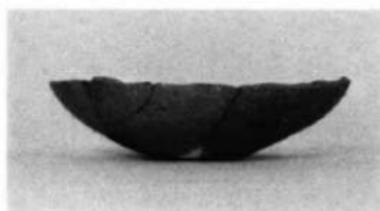
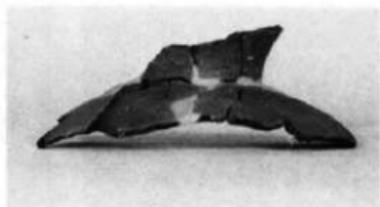
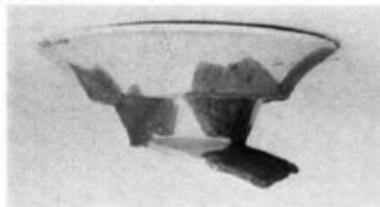


溝址 1 出土遺物

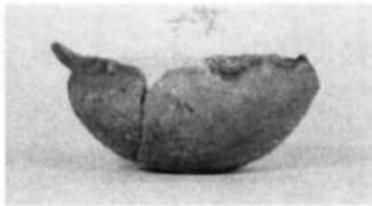
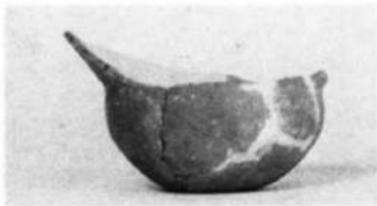
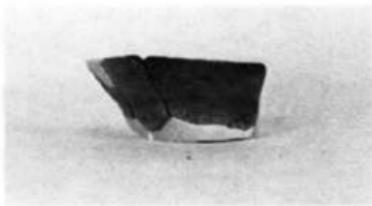
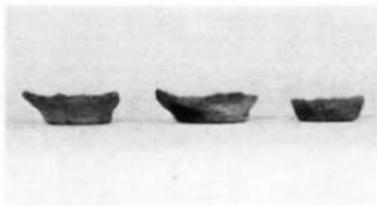
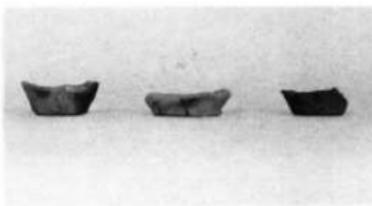
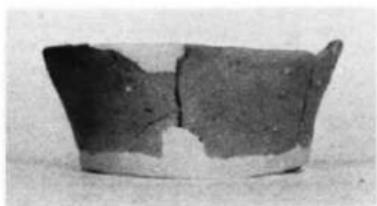
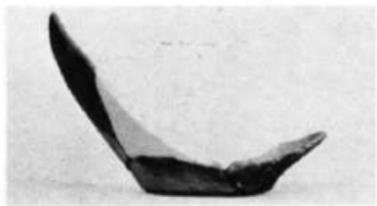


B・C 区造構外出土遺物

図版 27

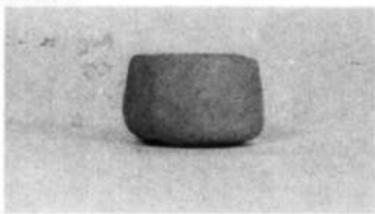


E区遺構外出土遺物

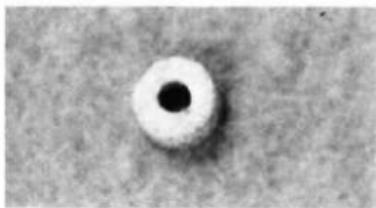


E区造構外出土遺物

図版 29



E区遺構外出土遺物



丸山遺跡 出土鉄製品・石器



調査風景



見学風景

図版 30



調査風景



同

羽場丸山地区土地区画整理事業第1工区羽場一大瀬木線
建設に伴う 埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸 山 遺 跡

発 行 日 昭和63年3月31日

編集・発行 飯田市教育委員会

長野県飯田市大久保町2534番地

印 刷 (有) 飯田プリント

